邪神じゃなくて守護者になりたい

笑う珍獣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
邪神じゃなくて守護者になりたい

【Ｎコード】
Ｎ０７１８Ｘ

【作者名】
笑う珍獣

【あらすじ】
なぜか邪神の体で転生させられた俺は守護者になるべく頑張ることにした。あ、でも分別はするよ？だって邪神だもん。※注・この小説は主人公最強ものです。それと主人公は人外です。

邪神転生（前書き）

最近人外ものの作品にはまってしまい、自分でも書きたくなりました。主人公がいろんな世界を旅する話しにしたいとか考えてます。

邪神転生

子供を庇って車に引かれたと思ったら、真っ白い空間で変な爺さんの前に立っていた。え、なにこれ？

「ふむ、変な爺さんとは酷いの。ワシはお前たちが言うところの神じゃよ」

「――――？、――――――！？」

「すまんが、今のお前さんは姿だけを再現しただけで話したりは出来んのじゃ」

確かに口が動いている感覚がない、それどころか自分が立っているのか座っているのかも分からなくなってきた。そもそも俺は――――

「まずいの、魂の劣化が思った以上に早い。いいか、無駄話は出来ぬからよく聞くのじゃ。お主は子供を庇って代わりに車に引かれて死んだのじゃ。実は今回の事故は新米神のミスによるものでの、本来ならあの子供がそのミスで死ぬ運命にあったのじゃが、お主が運命をねじ曲げてまでして助けたのじゃよ。代わりにお主が死んでしまったが、お主が成したこれは凄いことじゃ。いやはや、これだからヒトは面白い。絶対ではないにしても、運命すら打ち破るその力、久しぶりに見させてもらった。じゃから、そのお礼にお主を異世界

に転生させてやろう。・・・じゃが、ただ転生させるのも芸がないでの。お主に力を授けてやろう。上手く使えば敵なしじゃ。使い方は体が知っておる。では、行って参れ」

「――――！？」

目の前の爺さんが一方的に話して横凪に手を振るうと、俺の視界は白から黒へと瞬く間に反転した。

「ふぉふぉふぉ、これで久々に楽しい暇つぶしが出来そうじゃわい」

最後に何かが聞こえた気がしたが、それを脳が認識するよりも早く、俺の意識は霧散していった。

◇

村外れの山の中にその古くさい小さな社はあった。

その社がいつからそこにあったのかは村の誰も知らない。

村で一番知識に溢れ、いつ死期を迎えてもおかしくないほどに年を重ねた最長老ですら、それが元は何を祀りいつ頃作られたのかは分からなかった。

ただ、それが村が出来るずっと前からそこにあり、自分たちの生活を見守ってきたことだけは皆が知っていた。

そして不思議なことに社の近くには獰猛な獣が全く寄り付かず、逆に様々な植物が生命の息吹を感じさせるように生い茂っていた。

だからなのか、いつしかその社は森神様を祀っているとされ、森神様の社と呼ばれて大切に管理されていた。

そんな社に村の方から小さな影が近付いてくる。

両手に村で採れた山芋を抱えて現れたのは小さな女の子。

彼女は片親であること以外は、村に住む極普通の女の子だった。

まだ畑仕事に手を出して日が浅い彼女は、両手に抱えた初めて収穫物を日々のお礼と共に森神様にお供えに来たのだ。

「森神様ありがとうございます。初めての収穫も実り豊かになりました。どうかこれからも私たちのことを見守っていてください」

村人たちの手で作られた石の祭壇に山芋を乗せて手を合わせて祈る。

誰が始めたのか言い出したのか、森神様は村の守り神と豊穣の神として古くから親しまれていた。

少女もその例に漏れず、森神様を祈りを捧げるべき対象として見ていた。

しっかりと祈りを捧げた彼女は社脇に置かれた箒を手に取り簡単な掃除を始める。

これは村で定められた決まりで、社に祈りを捧げた後はその場を清めて帰ることが当たり前となっているからだ。

清めるといっても辺りに散らかった落ち葉や枝を退けるだけなので手間や時間はそれ程かからない。

事実、子供の彼女でもすぐにその作業は終わり、今は腰を下ろして一息着いてるところだった。

と、そんな時彼女は不意に誰かに呼ばれたような気がした。

だが周りを見渡しても誰もいない、社があるのは村外れの山の中だ。
用がなくては誰も立ち入らない場所である。
加えて、この森に自分の村以外に村があるとは聞いたことがなかった。
そのため、彼女は気のせいかと頭を捻り、ぼんやりと社を眺めることにする。
森神様ってどんな姿をしてるんだろうだとか、どうして姿を見せてくれないんだろうとか子供心に感じていることを考えていた。
そんな自分の疑問がこの後思いも寄らない形で答えを出されるとはこの時の彼女は思いもしなかった。

休憩も終わりにして、そろそろ村に帰ろうと腰を上げた時だ。
また不意に誰かに呼ばれた気がした。
いや、気がしたんじゃない、今度ははっきりと聞こえたのだ。
声は頭の中に直接語りかけてくるようで、どこから聞こえてくるのか全く分からない。

だが、自然と足は動く。

声の元へ、操られる様に。

ゆっくりとゆっくりと、彼女の足は進む。

辿り着いたのは社の裏にある小さな洞穴。

それは誰にも暴かれることなく太古の昔から現代へと時を封じ込めた箱舟。

いったい何を守り残したのだろうか、今まで誰も中に入れなかった箱舟が彼女の前にそこにあった。

声はこの中からだ。

正しく導かれるように岩に囲まれた道を確かな足取りで進む。

奥には入り口からは想像できないほど大きな空間があった。

壁にこびり付いた苔が唯一の光源だったが、彼女はそこに淡く光る大きな卵を見つける。

「もしかして、あなたが私を呼んだの？」

彼女の呼びかけに答えたのか光を強める卵。
頭に直接呼びかける声は既になくなっていた。
さて、困ったのは彼女だ。
謎の声が聞こえたと思ったらいつの間にかこんな場所にいる。
加えて目の前には自分を呼んだと思われる謎の発光する卵。
こんな時どうしたらいいかなんて唯の村娘である彼女には思い浮かばなかった。
悩んだ末、とりあえず卵の周りに何かないか探索してみることにした彼女。

「あったのはこの黒い石だけ・・・」

三十分後、手にした黒い爪のような石を眺めている彼女がそこにいた。
この空洞を大方探してみて、見つけたのはよく分からない石と光る卵だけ。
やっぱり誰もいない。

この場所に出てから例の声もなく、自分が呼ばれた理由も何一つ分からない。

いよいよ途方に暮れた彼女は再び卵に目を向け語りかける。

端から見たら頭の痛い子にしか見えないだろうなと思いつつも、なんとなく彼女はこの不思議な卵が自分を呼んだのだと無意識に理解していた。

「それにしても本当に何の卵なんだろう。光る卵なんて普通じゃないよね？もしかして、森神様とか・・・なんて、ないか」

少し前に考えていた自分の疑問からもしかして！と考えてみるも、なんだか都合のいい妄想だと考えて頭を振る。

でも本当に何の卵なのか、好奇心は抑えきれない。

このままここに置いとくのも何だし持って帰ろうか、彼女がそんなことを考えだした、その時だった。

ごそごそ。

卵が動いた。何かが生まれる。

そう思った瞬間、考え事なんて頭から瞬く間に消え去り、緊張した面持ちで新しい命の誕生を見守る少女。

無意識に握りしめた黒い石が卵と同じように淡く光っていた。

卵にヒビが入る。何かが中から殻を力強く押し退けようとする。

少女は生まれて初めて立ち会う命の誕生に魅入られた。

堅く握りしめた両手を胸の前に持ってきて一生懸命応援する。

頑張れ頑張れ、もう少しだよ。

彼女の応援に励まされるように、卵の殻は中から突き破られた。

ドロリと中身が流れ出てくる。

羊水の様な液体と共に中から流れ出て来たのは、彼女が今までに見たことがない生き物だった。

手足のない銀色の小さな体に嘴が頭と混じった鳥のような頭、体からは手足の代わりなのか四本の触手が生えていた。

全体的に丸い印象を与えるその生き物は小さく瞑らな瞳で彼女を見上げて、鳥の様に甲高い声で鳴いた。

「ピー」

「えと、まさか本当に森神様？」

謎の生き物の誕生にまさか冗談が本当になるなんてと呟く彼女だったが、当の本人は何やら自分の体を見てピーピー鳴きわめいていた。

もし彼？に言語を司る器官が備わっていたらなら恐らくこう言っていただろう。

「なんじゃこりゃあああ！？」

つまり、この謎の生き物は神に転生させられた彼だったのだ。

邪神転生（後書き）

主人公が転生した体はガメラ３のイリスです。平成ガメラシリーズって個人的には敵怪獣の方が好きなんですよね。レギオンとかイリスとかガメラより好きでした。

村での日々と募る不安（前書き）

この世界は三話か四話くらいで終わらせる予定。

村での日々と募る不安

あの衝撃の出会いから一年経った。

最初は自分に起きた予想を超える出来事に頭がどうにかなりそうだったが、一生懸命に俺の世話をしてくれたリコットのおかげで何とか現実を受け入れられた。

リコットは俺が生まれる時、その場にいた少女の名前だ。

彼女は誰かに呼ばれるようにあの場に導かれたらしい。

絶対にあの爺さんの企みだ。

何を企んでいるかは知らないが、生まれた場所にリコットがいたのは幸いだった。

彼女は生まれたての俺を抱えて村まで連れて帰ってくれた。

後で水に映る自身の姿を見て、よくこんな奇怪な生き物を村に連れ帰ったものだと感心したものだ。

彼女曰く、俺は森神様なんだと。

で、村に帰ってからが大変だったらしい。

なにせ、まだ幼い少女が謎の生き物を抱えて戻ってきたのだ。

もちろんだが村中大騒然で、その日の内に大人たちを集めて急遽俺の処遇についての集会が開かれた。

俺自身はその身に起きた頂上現象で頭がこんがらがっていたため、詳しい内容は覚えていなかったが、後で詳しい話をリコットが教えてくれた。

結果、俺は森神様ということになり、村で暮らすことが許可された。

問題だったのは、俺が初めて目にしたリコットに強く引かれていたせいなのか、彼女から決して離れようとはしなかったことだったようで、仕方なしに彼女が俺の育ての親に任命されたらしい。

恐らくこの体に初めて見たものを親だと思う習性でもあったのだろう。

自分でもその辺はよく分からないが、大勢の大人に囲まれる中で無意識に見知った顔を求めたのだと思えば納得も出来た。

とにかく俺はリコットの家で一緒に暮らすことになったわけだ。

◇

さて、今俺の目の前にはだいぶ前に収穫を終えて放置されていた畑が広がっている。

これを今から新しい種を植えるために耕そうというわけだが、ここで森神様な俺の出番である。

ふわふわと畑の上に飛んでいき、体に備わる四本の触手を伸ばし地面に叩きつけるようにして土を掘り返していく。

ある程度土を柔らかくしたら、次に大気中から吸収したマナを栄養に換えて、間隔を空けて地面に刺した触手の先から土に向けて放出する。

マナが元々超自然エネルギーであるからか、この方法で栄養を混ぜ合わせた土は生命力に溢れた作物を約束してくれる。

これはあの爺さんが言ったようにこの体を意識してみた時に発見した技で、これを使い始めてからは名実共に森神様となったわけだ。

体が教えてくれたがマナとは星の生命力と言い換えられるエネルギーで、全ての生き物、無機物ですらその存在の根底にはマナが関わっているらしい。

ぶっちゃけた話、マナは何にでも作り替えられるし、どんなエネルギーよりも力を持ち、実体を持つことすら当たり前に出来る万能なエネルギー源ってこと。

この星の大気中には今でも極僅かだがマナが混じっているため、今回はそれを吸収して体内で作り替えた。

加えてこの体はどうやらマナを吸収して成長するようで特にこれと言って食べれないものはない。

当たり前だ、全てはマナで創られているのだから、マナを食料とするこの体に的さない食べ物など存在しない。

ただ味覚が人間の時と比べると弱くなったのだけども、決して無く

なったわけではないので、出来れば美味しいものが食べたいわけだ。

俺が畑仕事に関して全力で協力するのは村に置いてもらっている恩返し以外にそう言った個人的な願望もあるってこと。

俺の体についてはこの一年で大体の所を理解したが、今はマナが自由に操作できるってことと浮遊出来ることを説明すればいいか。

今のところ他の能力は特に必要ないしな。

その後作業は滞りなく進み、一時間ほどで村の畑は全て俺特性の栄養材を注入した森神様の加護付きの畑になった。

これで次の収穫も実り豊かなものになるだろう。

ふふふ、今から実に楽しみである。

『ん、この感じはリコットか？』

マナが操作出来るこの体には個人が発するマナの波動を分別、感知する探知機の様な機能が備わっているのだが、これは俺の努力により五メートルくらいしか使えなかった最初の頃と比べて、今では村全体をカバー出来る程になっていた。

もちろんこの体のスペック的にまだまだ使いこなせていないのは明白だったので、今でも空いた時間で体の力を引き出す練習は欠かしていない。

「イリス様ー！終わりましたかー！」

俺の姿を見た赤毛の少女が声を上げながらこちらに向かって来る。

あれから少しだけ大人に近付いたリコットは素朴だが気の利く笑顔の可愛らしい娘に成長していた。

彼女の方に向かってふわふわと漂っていくと、俺はいつものように彼女の腕の中に収まる。

だが困ったことに、こうすると必ず彼女は何だか可愛らしいものを見るような眼差しで俺を見てくるのだ。

「あぅ、イリス様可愛いよぉ、特にこのすべすべした肌触りが最高だよぉ」

「キュー『あーはいはい、いつものやつね』」

村人たちは皆俺のことを可愛がってくれるのだが、その中でもリコットは特に俺のことを可愛がっている。

俺のイリスという名前も彼女が付けたものだ。

人間だった頃の名前はどんなに頭を捻っても思い出せなかったので、今はそれが俺の唯一の名前になるのだが、悪い気はしない。

むしろ気に入ってるくらいである。

人間だった頃の記憶もなんだか不自然に欠けているし、恐らくこれがあの時神の爺さんが話していた魂の劣化ってやつかと納得した。

納得せざる終えないのだから考えても仕方ない、ならばこの生は大事にしないといけない、と気合いを入れるのが俺だ。

記憶はなくてもそんなところは変わらない、俺が俺である証明なんてそんなものだ。

「すべすべー」

「キュー・・・」

・・・いい加減満足してくれないかなぁ

自分の真ん丸な胴体に頬を擦り付けてにやけるリコットに対して、この時の彼女にはどんな抗議をしても無駄だと知っている俺は疲れたような鳴き声を上げるのだった。キュー。

◇

畑の処置を終えた俺はリコットに抱き抱えられて村に戻ってきた。

その道中で村の人々と挨拶を交えながらリコットの家、つまり今の我が家へと向かう。

家でリコットの母親であるエミリーさんと共に三人で昼食をとり、午後からは二人が簡単な道具作りを行うのを横で眺めながら自分は力の扱いを練習、もちろん危険な力を扱う場合は二人に内緒で夜中に行う。

この体は睡眠とかあんまり要らないみたいだし、夜中に村を抜け出すのは習慣となっていた。

たぶん二人にはバレていないと思う。

そして深夜、今日も習慣である力の練習のために家を抜け出す。

最近村の近くにいい感じの湖を見つけた俺はそこで毎日力の練習をしていた。

練習するのはマナを使ったある種の魔法だ。

大気中から取り込んだマナを体内で練り上げ世界に影響を与えやすい力、仮に魔力と名付けよう、に換える。

それを体を通して火や水、雷や風に変えて世界に作用させるのが俺的な魔法である。

マナでは生態系に影響が出るのと変換効率が悪いため、その辺りをいじった使いやすい魔力を作り出したってわけだ。

ちなみにマナは上手く制御出来れば物質を創造することも可能だが、今の体ではそこまで無茶なことは出来ない。

ま、成長するまで待ちましょうってことだな。

本来世界を形作るマナを操ることが出来ること自体がおかしいのだが、この身は神が用意したものだし、転生する際に力を付けるとか言ってたのも微かに覚えている。

確かに上手く使えば敵なしの力だが、なかなか体に馴れない現状では便利な能力止まりだ。別にいいけど。

今はとにかく体に馴れることが先決、つまり日々の地道な努力だな。

今日も今日とて魔法のイメージを固める作業、魔力を使った魔法は使用する際のイメージが世界に現実として作用するのだからイメージは一番大事。

イメージが出来たら呪文の形で自分の中に定着させて魔法は完成だ。

今のところ完成した魔法は火と氷と雷の魔法だけだが、それ以外も順調にイメージは形作られている。

この三つはたまたま記憶にあったファイナルファンタジーの魔法でイメージを固めた。

名前は本家と変わらずファイア、ブリザド、サンダー。

覚えているのはこの三つだけだったが、たまに断片的にだが記憶を取り戻すことがあるため、なかなか進展のない闇や光、重力なんか

はそれに期待している部分もあった。

で、さっき湖で自分の姿を眺めていた時に新しい記憶を思い出したんだが、それによりこの体の正体がやっと分かったのだ。

この体の正体は邪神イリス。

平成ガメラシリーズ第三弾『ガメラ3邪神覚醒』にてガメラのライバルとして登場した怪獣だ。

劇中でのイリスは一メートルもない幼体から成長し、最終的に約百メートルの成体へとその身を変えて、ガメラと激しい戦闘を繰り広げた。

イリスはガメラと同じくギャオスに対抗するために超古代文明によって創られたのではないかといった説があり、その説が考えられた理由としてはイリスを封印していた場所にガメラの勾玉に似た黒い勾玉があったことや、その別名からガメラと同じく四獣、南を司る朱雀と関しているのではないかという話があったからだ。

真相は定かではないが、劇中でイリスを育てた少女は両親をガメラに殺されてその復讐を願いながらイリスを育てたのだ。

少女のガメラへの憎しみに反応して成長した姿が劇中のイリスだとしたら、それ以外の人を思い愛する気持ちで育てられたイリスはガ

メラと同じく、人類の守護者に成れたのではないかと俺は思っていた。

事実村の人々から愛されているこの体は邪神とは程遠い存在として成長している。

森神様として、村を護る守護者として存在を確立し始めているのが確かに分かるのだ。

そして俺を育てその方向性を決めるのは勾玉に選ばれた人間であるリコットであるのは確実だろう。

今まで彼女にどこか身を惹かれていた理由はそれだったのだ。

ここ一年のちょっとした疑問が解決した瞬間だった。

だが、これが事実なら新たな懸念が出来てしまったことになる。

つまり俺というイリスが存在するのだから、最悪ギャオスもまた存在する可能性が出てきたのだ。

もし先に上げた仮説通りならば、イリスもガメラと同じくギャオスに対抗するために生み出された存在、イリスの存在こそがギャオスの存在の証明でもある。

これはあり得ない話ではない。

俺は劇中のギャオスによる被害を頭に浮かべて、転生してから無くなりかけていた僅かな恐怖心を確かに感じていた。

もし、もしもだ、この世界にギャオスがいたのだとしたら、俺は村の人々を護りきれるのか。

ギャオスは群を成して狩りを行うのだぞ？

いかに自分の体がイリスのそれだと言えど、幼体のままでは誰が村を護りきれると言えるのか、いや今のままでは圧倒的に力が足りなすぎる。

マナの運用が少し出来るくらいでは勝ち目はない、体の成長も劇的な変化を期待出来るわけもなく、未だに幼体から成長する気配もない。

今の俺に出来ることと言ったら、魔法の開発に力を入れることくらいだ。

ギャオスの一匹や二匹どうにか出来るくらいには魔法を発展させなければ、村は護れない、リコットもエミリーさんも護れない。

『そんなことにはならない、よな？』

不安に揺れる銀色を照らすはずだった月は気がつけば雲に隠れて消えていた。

不安は消えない、その日から俺は魔法の開発に力を注ぐことになった。

そして、その不安が確信へと変わり始めるのには差ほど時間は必要としなかったのだ。

――――三ヶ月後、ギャオスは来た。

村での日々と募る不安（後書き）

イリスって最高飛行速度マッハ九で飛ぶらしいんだけど、それって具体的にどのくらい早いの？って疑問がありますが、何方か分かりやすい比較対象を知っていたら是非教えてください。

なお、劇中ではイリスのことはギャオスの変異体とされていますが、この作品ではガメラと同様に超古代文明によってギャオスを倒すために突起状の器にマナを集めて創り出されたことにします。

作中の仮説についてはｗｉｋｉや個人サイトの考察を元にしています。

災悪は来たりて（前書き）

なんだか無理矢理な展開ですが、気にしては駄目。

災悪は来たりて

その日は唐突に、だが、まるで最初から定められていたかのように彼らへと訪れた。

初めに気づいたのは誰だったか、いや今となっては誰でもいい、とにかく誰かが空を指さし声を上げたのが始まりだった。

空に無数の黒点、鳥・・・にしてはあまりにも大きいその何かは私たちの村に向かって一直線に飛んでくる。

それが何かを脳が正しく理解する前に、彼女は隣にいた彼がいなくなっていることに気がつく。

影が彼女を覆った。

恐る恐る見上げた彼女が目にしたのは――

ぐちゃぐちゃり、ぐちゃ、ぐちゃ。

見慣れた服を着た”何か”の胴体にかじり付き、味を確かめるように咀嚼する化け物の姿。

化け物がその鋭利な歯を”何か”により深く突き立てると、”何か

”から赤い液体が飛び散るように辺りに降り注いだ。
彼女は浴びた、今浴びたのは何？彼はどこ？あれは何？あの見慣れた服を着た”何か”はあれ？彼？違う、違うはず。

「あはは、夢よ、悪い夢。だって、こんなの――」

認めたくないと目を反らしても現実は容赦などしない。
唯現実を認められずにその場で立ち尽くす彼女は最初から既に化け物の餌でしかないのだから。
誰かが叫び声を上げるのを聞いたと同時に、彼女は肉を裂かれた。

「ぎゃあああ！」

「いやぁ！あなたぁ！？」

「ママー、怖いよ、こわ――っ！？」

「坊や！いやぁあ！いやよぉ！」

「くそっ、何なんだよあの化け物は！？」

「いやぁあ、離してっ！お願いだからぁ、娘が娘がまだあそこにいるのよぉお！」

「もう手遅れだ！あんたまで食われちまう！」

「うわぁあん！お母さんお母さん！いや、助けてぇえ！痛い痛い！やめてやめ、っ！？あ゛゛ごほっ、おがぁ、たずげ・・・」

「いやぁああ！！」

「ば、ばか！行くな！」

これが悪夢、正に悪夢としか言いようがない惨状が化け物たちによって瞬く間に創り出されていく。

母親が泣き叫び、幼子が年に合わない絶望に彩られた声を響かせ、男は恋人を助けようとして上半身を丸ごとかじり取られて足だけをその場に残す。

ただ逃げることしか出来ない彼らは安全な地を求めて村の外の山へと走り出した。

山なら隠れる場所は多い、そこで隠れていればきっと助かるはずだ

と誰かが言葉にして、今はそれに同意した人々が山に向けて避難している最中。

だがそんなことは関係ないとばかりに狩りを続ける化け物たち、その狩り場の中で村人の避難を助けるのは彼らが森神様と呼ぶ銀色の生物だった。

ここ三ヶ月で少しだけ成長した体から火弾を放ち、氷の刃を飛ばし、雷の槍を突き刺して化け物――ギャオスを確実に殺していく。

一匹にかまっている暇などないが、完成した魔法の威力からして一撃必殺は叶わなかったし、ギャオス自体の生命力が予想以上に馬鹿げていたのだ。

劇中ではガメラの火球の一撃で葬られていたが、あれはプラズマの火球だったが故だ、加えて村を襲っているのは鋭利な体つきからギャオス・ハイパーだと分かった。

ギャオス・ハイパーはギャオスからより戦闘用に進化した個体だ。

全体的な戦闘能力の上昇も成されており、その皮膚を貫通してダメージを与えるには最低でも初期のガメラのプラズマ火球並の威力が必要だろう。

そこまでの威力を持つ魔法はこの体で生産出来る魔力では到底成し得なかった。

今俺が対抗できているのはギャオスの群がまだ子供だったことと、マナ転換器官と呼べるものをフル回転させて数による力押しでなんとかしているからだ。

もちろん、必然的に一匹殺すのに費やす時間は増えるが、生半可な攻撃では効かないのでこれしか選択肢はない。

攻撃を数匹に分散させてもギャオスは止められない、逆に失った血肉を求めて獲物へと一直線だった。

それで最初は何人も食われた。

だから、こいつらは一匹づつ確実にしとめるていくしかないのだ。

少しでも被害を減らすために。

当然注意を引き付けて自分を囮にすることも試してみたが、よほど腹を空かせているのか俺には見向きもしなかった。

だが、幸いにも一度に狩りを行う数は村の広さからして少なく、何とか足止めは出来ていた。

リコットやエミリーさんも既に山へと避難を終えている。

今はただ、目の前の災悪を排除する、それだけに意識を集中するのだった。

◇

イリスが村を襲ったギャオスと戦っている頃、森神の社に向けて逃

げていた村人たちの集団は悲しみに満ちていた。

元々狭い村だ、誰もが失った誰かと知り合いだったし、家族であったし、恋人でもあった。

彼らの頭上には未だに無数のギャオスが旋回して獲物を探している。

今は生き残るために、悲しむより先に足を進めなければならない。

村の方から火や雷が空に向かって飛び出すのをリコットとエミリーは不安そうに眺め、やがて何かを振り切るように身を翻し、ギャオスに見つからないようにと森に隠れて早足で進む村人たちの集団を追うのだった。

だが、村人たちは思い違いをしていた。

ギャオスはどちらかと言えば鳥ではなく蝙蝠に近い生き物だ。

つまり、狩りに使われるのは主に視覚ではなく超音波によるある種のソナーであり、そして示し合わせたように社の周りの森には動く生き物が彼ら以外には存在しないかった。

彼らが最後の望みを託して辿り着いた森神の社は、皮肉なことに生け贄の祭壇となる。

◇

『サンダー！サンダー！ファイア！』

魔力を練り上げギャオスの頭や羽に向けて魔法を連発する。

やっとのことで一匹倒した後は、すぐさま無くなった魔力を新たに

生成し、再びそれを相手に叩きつける。

ひたすらそれの繰り返し。

ギャオスの襲撃から既に一時間、俺の努力により群の数は着実に減っていた。

だが、同時に魔法の連続使用により大気中のマナも減り、満足に魔力を生成することが困難となってきている。

このまま大気中のマナを消費し続けるのは不味い、マナは大地を循環するエネルギーの顔も持つため、マナの大量消失は生態系の崩壊も意味する。

ギャオスを撃退できても、村や周辺の森が死に瀕するのは絶対に許容出来ない。

ここからは体内に貯蔵したマナを使うしか方法はない、だがそれは正しく命を削る戦い方であり、全てが終わった後にこの体が無事である保証など何もなかった。

『だからなんだ、元々二度目の生なんてないのが当たり前だ。なら、迷いなんかいらないっての』

覚悟はある。不安を切り捨てた彼は貯蔵したマナを使い、今まで以上の集中砲火を繰り出しギャオスに挑みかかるのだった。

群は残りわずか、このまま押し切る。

そう思ったその時だ。

災悪の最悪が、現れた。

その巨大な体が村の大部分を覆う影となり太陽を遮る。

その姿は今まで相手にしてきたギャオスと酷似し、だがそれよりもさらに凶悪なフォルムを成して、そして絶望を突きつけるように赤黒い。

ギャオス・ハイパーの成体がそこにいた。

現れた成体は村には降りずに、村の周辺をただ旋回している。

何が目的なのかは分からないが戦闘に参加しないというなら、まずは村で仲間の死肉を貪る子供のギャオス共を殺すのが先だ。

万全の状態ですら勝ち目のない相手なのだ、下手に刺激しない方がいいと判断し、警戒しつつもギャオス共の排除のために体を動かす。

それが、その判断が、彼らを殺した。

上空で旋回していた成体ギャオスは突然何かを見つけたかのように地上の森に向かって急降下していった。

そこは村で森神様の社と呼ばれる場所で、彼女たちが避難していった場所で、自分がリコットと出会った場所で、そして今はただの狩り場だった。

『リコットッ！』

もはや村にいるギャオスなんかにかまっている暇はない、勾玉を通して伝わってくる彼女の恐怖や悲しみが俺を襲う、不味い不味いマズイ。

マナが不足気味でふらつく体に鞭を打って、こんな時でも浮遊しか出来ないことに悪態を付きながらも可能な限り早く動く。

あの時は彼女に抱えられて歩いた道を今は一人で突き進む。

辿り着いたそこには赤黒い巨体が我が物顔で居座っていた。

辺りには破壊された社に倒された木々の数々、そしてそれらに色を与えるのは赤い、赤黒い肉の破片と飛び散った血飛沫、断末魔の声は既になく、そこにあったのは奴の口からこぼれ落ちた誰かの足や腕のパーツだけ。

こんな、こんなのって・・・！

怒りに任せて飛び出そうとする俺を止めたのは運良く生き残っていたリコットだった。

「だめ、だめだよ。イリス様まで殺されちゃう・・・」

後ろから俺を抱きしめる彼女の両手はぬめりとまだ暖かい血で染まっていた。

彼女の胸に吊された勾玉が嫌でも教えてくれる、彼女の一人にしないで欲しい、一緒にいて欲しいと言った誰かに縋るような鮮明な感情。

そうか、エミリーさんはもう・・・

泣き声を押し殺して身を潜めるしか出来なかった少女は、今もただ彼をきつく抱きしめることしか出来なかった。

その後、二人で息を殺して俺が生まれた洞窟へと逃げてきた。
道中でマナを探知してみた結果、村の生き残りは俺たちだけだった。
ここまで一緒に逃げてきたリコットも酷い怪我を負っていたせいで、
その身に許された時間は残り少ない。
結局、俺は誰も救えなかったのだ。
イリスの体が劇中のような成体になれさえすれば成体ギャオスの数
体くらい余裕で相手出来ることなど分かっていたが、あれは人の遺
伝子を取り込んだ末に成し得た成長、いや進化だ。
だからって、だからといって、俺には村の誰かを生け贄にする方法
なんて選べない、選べるはずがない。
・・・だが皆を殺した奴らはユルセナイ。

「・・・イリス様、私を・・・使ってください・・・」
「キュー！『な、馬鹿なこと言うなっ！自分が何を言っるか分かっ
てるのか！？』」
「あはは、酷いなぁ。・・・分かってますよ。だから、誰かが犠牲
になるなら私がいいんです」
いつからだろうか、交信するために存在する勾玉がイリスの考えを

イメージとしてリコットに伝えていた。

勾玉からイメージを受け取った彼女はイリスが与えられた真の使命を漠然とだが感じ取っていた。

つまり彼女は自分が長くないことが分かっていたからこそ、心優しい彼だけに負担をかけたくなくて、自らその方法を提案したのだ。

彼は悩んだ。

確かに目の前の彼女を取り込めば奴らを殺せる体に成長出来るのだ。

気持ちが揺れた、その事実が彼を苦しめる。

心まで化け物になっていくのが怖かった。

「イリス様・・・、私はあなたの優しさを知っているから、だから、悩まないでください、迷わないでください。私があなたの中でずっと見守っています。だから、あなたの成すべきことを・・・。大好きです、私の大切な家族・・・」

最後まで彼女は優しさに満ちあふれた人間で、それに甘えて俺は泣いた。

冷たくなり始めた彼女の体に触手を優しく抱き寄せるようにして巻

き付け、自分と彼女を覆うように周りにマナの繭を何重にも張り巡らせる。

その中で安らかな顔で逝った彼女を見つめながら、ゆっくりと眠りにつくように意識を薄めていく。

『共に行こうリコット、俺は――』

――――使命を果たす。

数日後、彼の戦いは始まった。

災悪は来たりて（後書き）

次回はギャオス狩りが始まるはずだ！

邪神覚醒（前書き）

毎度お馴染みの低クオリティ仕様です。只今、主人公のキャラが迷走中。

邪神覚醒

邪神イリス。

劇中で彼の者が解放されれば世界を終焉に導くとまで言われていた理由には、その貪欲なまでの成長力があるのだ。

イリスには触手などを相手の体内に打ち込むことで遺伝子情報を読み取り、そのＤＮＡを解析して自分のＤＮＡに組み込むことで相手の能力をコピーし、染色体レベルで無限に自己進化する能力が備わっている。

正に最強の生物兵器に近い存在だ。

環境適応能力と繁殖能力がずば抜けているギャオスに対抗するには、それに対応するための能力が必要だと言うことだろう。

事実、同種の対ギャオス用の生物兵器だと考えられるガメラはシリーズを重ねる毎に、より高い戦闘能力を身に付けるために体をさらに洗練して、より強い戦闘用のそれへと創り変えている。

だが、イリスの自己進化ではあくまで生物の域を出ることはないのは分かるだろう。

多種多様な兵器や装置など、人が造り出した機械的なものには遺伝子なんてものは当然なく、それに該当するような器官や能力をその身に宿している有機的な生物は極わずかしか存在しない。

加えて、その多くが遺伝子操作などによって人工的に創り出された生物なのは明白だ。

つまり、理論的には無限に自己進化すると言っているが、生物としての限界値は決まっているようなものなのだ。

なら地球の外、宇宙に目を向ければその進化は止まらないのではないか？

これは当たりでもあり、ある意味で外れでもある。

発生した環境が異なるのだから、そこにいるのは炭素系の生物とは限らない、もしかしたら遺伝子構造など存在しない未知の珪素系の生物かもしれない。

ほら、既に現実的な限界値は見えている。

だがこの身は神様仕様の反則ボディであるのを忘れてはいけない。

あの爺さんは遺伝子だとかそう言ったレベルを飛び越え、相手を通して世界に保存されている存在の情報を読み取り、解析する能力を付けやがった。

加えてその情報を組み込むのは染色体レベルとかそんな生物的な方法ではなく、体を構成する源であるマナを直接変換して対応する器官を新たに創り出し、それを世界に対する自らの情報として自分の

存在に組み込むことで、結果的に自分の体を変質させる方法を取っている。

これにより、事実上全ての存在を取り込み、正しく無限に自己進化するイリスの究極体と言える存在が生まれた。

それが成体へと身を変えたことで発覚したこの体の真の正体だった。

・・・これって生物的には最強レベルの存在になったんじゃね？

神様仕様のボディは劇中のイリスが可愛く思えるほどの凶悪な魔改造振りだった。

◇

無事にリコットとの融合を果たし、繭から出た俺の体は劇中のイリス成体を二メートル程の大きさにした姿をしていた。

今までの丸いフォルムから人間に近い形をとり、胸や膝には部分的に光る発光体、腕や足は細身で、腕には槍のように長い杭がついた手甲があり、その頭は幼体のものを鋭く尖らせたようなものへと変わり、その中に特徴的な光る単眼が存在している。

成体になったことで、刺々しい甲羅がある背中に四つのジェット噴射機構が備わり、超高速飛行能力が新しく得られた部分は大きいだろう。

もちろんイリスを語るのに外すことが出来ない触手は肩の部分に各二つ、全部で計四つあり、その全てがマナを凝縮して強度や俊敏性、伸縮性などと言った性能を増大した強靱なものへと変わり、その先端にある鏃に似た器官からギャオスが放つような超音波メスを放つ能力が備わった。

全体的に劇中のイリス成体に比べて細身の体つきになったが、恐らく勾玉の巫女と完全に融合したことが原因だろう。

体の変化をそんな風に納得して、能力を確かめるために自分の内に意識を集中させると、微かだがリコットの存在を感じることが出来て、その時俺は自分のしたことの意味を改めて思い知ったのだ。

彼女の魂は輪廻に加わらず、常に自らと共にあり、そしてこの身に囚われ続ける。

それは果たして、自分を好きだと言ってくれた少女にしていい行いだったのか。

『迷わないで』

『ずっと一緒だから』

迷いを捨てきれない俺の背を押すのはやはり彼女の存在だった。

そうだ、何もせずに迷ってるだけでは、それこそ彼女に顔向け出来ない。

だから、今は彼女から貰った力を無駄にしないためにも使命を果たす。

イリスである俺の使命はギャオスを殲滅して人を護ること、それがこの身に遙か昔から受け継げられてきた使命。

それにこのチートボディなら努力次第で、もしかしたら自分の中にある彼女の魂に、再び肉体を与えることが出来るようになるかもしれない。

命の源であるマナの扱いを極めれば、その可能性は十分にある。

だから今は生物兵器イリスとして、ただギャオスを殺すことだけに専念しよう。

だが、迷いや優しさ、人の心は捨てない、俺は彼女に邪神じゃなくて守護者になることを望まれていたのだから。

なら最後の瞬間まで守護者として生きて、愛すべき星や人を護ろう。

それが彼女が言っていた、迷わないってことだと思うから。

決意を固めたその時の俺には胸の発光体が少しだけ暖かく感じた。

そうして決意を新たにした俺は、早速気持ちを切り替え、ギャオスを倒すために体の扱いに慣れる作業へと移ることにした。

とは言っても、体の形が人間に近いフォルムをしているためか、幼体の頃に比べて体に慣れるのにはさほど時間を必要としなかった。

『無限機関かよ・・・』

で、次に気を引き締めて、改めて体を詳しく調べたところ、この体にマナ生成器官と呼べるものが存在することが分かったのだ。

この器官はその名の通り、常に一定量のマナを体内で安定して生み出せるようで、この器官が生み出すマナの量は体を動かし戦闘する分には十分過ぎる程だった。

元々イリスにない器官だったので、恐らく爺さんが転生する際に与えた能力に引っ張られて創られたのだろう。

・・・とにかく、これでマナの減少を気にせずに魔法を使える。

マナの貯蔵量や一度に操れる量も増えたので、今まで手が出せなかった高威力の魔法も開発出来るはずだ。

流石に超音波メスだけでは対空能力に問題がありすぎるので、マナ生成器官の件は嬉しい情報だった。

その超音波メスについてだが、ものは試しにと使ってみた結果、ある種のレーザーと化していることが分かった。

実験に使った岩が綺麗に真っ二つになったのは当たり前だが、なんと後ろの壁にまで深い亀裂を作っていたのだ。

ちょ、超音波メスってこんなに威力あんの！？

ギャオスが使ってこなくてよかったと心底思った。

◇

能力の把握が出来た俺は洞窟を抜け出し、いよいよ村を巣にしているギャオス共の殲滅に向かう。

奴ら村の跡地に巣を作ってこの辺りを縄張りにしたらしく、建物の残骸にでも卵を植え付けたのか、数日で元の数まで増えてやがった。

俺たちの村が化け物の繁殖場に使われているのが胸クソ悪くて、今すぐ飛び出していって奴らを八つ裂きにしたかったが、今の大きさで成体ギャオスを相手するのはまだキツいと分かっていたので、どうにか気持ちを落ち着けた。

『どうやら、成体ギャオスはいないみたいだな・・・』

周囲の森を探知してみたが成体ギャオスの反応はどこにもなかった。

狩りに行っているのか新しい巣を作りに行ったのかは分からないが、何にしたってこちらにとっては好都合。

今村にいるのは子供のギャオスが五体だけで、地上に二匹と上空に三匹。

ならさ、俺が取るべき行動は成体ギャオスが戻ってくる前に皆殺しにしてしまうことだろう？

俺はその場でふわりと音もなく浮遊し、四本の触手の先端をギャオスに向け、待ち望んでいたかのように高まるその力を――――解き放った。

放たれた超音波メスが瞬時に地上にいた二匹の首と胴体を真っ二つに切断する。

二匹を断末魔すら許さずに葬った後、上空の三匹が仲間の異変に気づく前に、その命を刈り取るべく超音波メスを空に向けて立て続けに発射。

二匹は胴体に直撃して地上に落ちてきたがもう一匹には浅い、か。

残った一匹が怒りに染まった瞳でこちらに向かって一直線に突っ込んでくるのを見て、せっかくだから腕の手甲についた槍での迎撃を試すことにする。

『超音波メスだけに頼るやり方は駄目だからな、お前には実験台になってもらうぞ！』

突っ込んでくるギャオスを背中のジェット噴射機構を使い確実に回避し、がら空きの背中に向けて触手を鞭のように振るい地面に叩き落とす。

苦痛に満ちた呻き声を上げて起き上がろうとするギャオスの頭に向けて必殺の威力を込めた拳を叩き込む。

腕の手甲がギャオスの頭に触れた瞬間、そこに備わっていた槍状の杭が打ち出され、相手の肉を裂き頭蓋骨を打ち砕く――、だけには止まらず、衝撃で反対側の肉や頭蓋骨の大部分を吹き飛ばした。

完全に頭を貫通している杭を引き抜き元に戻すと、それによって支えられていたギャオスの頭が地面に広がるぐちゃぐちゃの脳味噌や肉片などに混じって白い破片がちらほらと見える血溜まりの中へとべちゃりと沈む。

・・・こちらも予想以上の威力だ。

流石、劇中で超音波メスすら防いだガメラの甲羅を貫通させただけのことはある。

二メートルしかない今の状態でこれなのだから、成長したらさらに高い破壊力が期待出来るだろう、これは接近戦の切り札として重宝出来そうだ。

その後、殺したギャオスの死体からマナを全て吸い尽くし、最大の特徴であるその環境適応能力をコピーして自分に組み込んだ俺は洞窟に戻り魔法の開発に着手することにした。

実際に戦闘してみて分かったことだが、超音波メスと手甲のどちらも申し分なかったがやはり中距離に対応する技が不足している。

それを補うための魔法だ。

タイミングがいいことに、先ほど新しく思い出した記憶の断片には欠けていた重力系統や光系統のイメージのヒントがあった。

それにより新たに創り出した魔法は全部で三つ。

一つは重力系統で新たに創り出した魔法で、強力な重力波を収束して撃ち出す重力波砲、参考にしたのは機動戦艦ナデシコに登場するグラビティブラストだ。

二つ目も同じくナデシコから、膨大なエネルギーで空間を歪ませ相手の攻撃を逸らす能力を持った防御用の魔法、時空歪曲場。

ただし、時空歪曲場については魔力で再現するより直接マナを高エネルギーに変換するほうが効率がいいし、高い効果を期待できる。

・・・のだが、今はそのための器官が存在していないので、それに

近いエネルギー変換器官を有した存在の情報を手に入れるまでは魔力を使った魔法の形で使用することにする。

これについては爺さんに与えられたマナ操作技術があればなんとかなると思ったが、マナを純粋なエネルギーとして変換することが出来なかったのだから仕方ない。

最後に光系統の魔法にはテイルズオブシリーズのデルタレイを参考にして、光の槍を手甲から射出する魔法を創った。

この魔法は手甲に光の槍を固定して、リーチを伸ばした格闘用の武器としても扱うことが出来るようにしておいた。

接近戦が一撃必殺気味なパイルバンカーだけでは不味いからな。

もちろん、他の魔法もより威力を増すように強化していくことも忘れない。

恐らく今回のギャオスから取り込んだマナと、この体が創り出すマナでこれから急激な成長が期待出来るはずだ。

ある程度体の成長が落ち着いたら、あの成体ギャオスを殺しに行こう。

・・・復讐ではない、とは言わない。

個人的に殺したいと思う感情もあるし、実際に目にしたらそれを我

慢出来る自信もあまりない。

だが、これも確かに人間の心なのだから否定したくはないのだ。

それから一週間後、体の成長した俺は本格的にギャオスの殲滅に繰り出した。

邪神覚醒（後書き）

次回はガメラと一緒にギャオス狩り？

守護者との邂逅、旅立ちの時（前書き）

亀の王者ガメラ登場。

守護者との邂逅、旅立ちの時

劇中でガメラはギャオスに対抗するために超古代文明が創り出した一種の生物兵器と言われている。

そんなガメラは甲羅状の器にマナを集めて創られたとされているが、実はもう一つ大切な構成要素が存在すると考えられる。

それは人間の魂。

これがガメラを動かす意志となり、その強大な力を最大限に発揮する要となっているわけだ。

これは劇中に登場した無数に存在するガメラの死骸と、巫女である草薙浅黄がガメラを表す際に使った一人という表現から考えられる説だ。

この説通りに考えるとすれば、無数に存在するガメラの死骸はその体と適合出来なかった者の成れの果てだと説明出来る。

話としてはこうだ。

超古代において自らが創り出した末に暴走したギャオスから愛する者を護るために、多くの若者が自らガメラになることを名乗り出た。

だが、誰もがその器と適合するわけではなく、失敗すればただ死があるのみ。

もちろん適合に失敗した器は二度と使うことなど出来ない。

そして、それを乗り越えガメラとなった者も適合率によっては予想されるスペックを出し切ることが出来ずに、戦いで敗れ朽ちていくか、やがて適合出来ない部分から生じる魂の摩擦により朽ちていく。

その完成しなかったガメラ達が葬られた場所こそが劇中のガメラの墓場である。

そして多大な犠牲を生んだ末にガメラは完成し、ギャオスの驚異から人々を守り抜いた。

後の歴史でもギャオスの発生と共にガメラは現れ、星や人を護るために人知れず戦い続けてきたのだろう。

器と完璧な適合を果たした誰かが劇中に登場するガメラだとしたらどうか、そうだとしたら草薙浅黄がガメラの中に見たのは超古代人の魂だったのではないだろうか？

矛盾はあるかもしれないが、なかなか筋の通った話だろ？

そして、この話がこの世界においては唯一の真実なのだ。

劇中のイリスと同じく体長百メートル近くまで成長した俺は自分が

いた大陸のギャオスを全て殲滅し終わり、体が成長して範囲が拡大したマナ探知能力、を最大領域まで広げてギャオスの足取りを探した。

予兆もなく突然現れたことから発生源はこの大陸ではなく、他の大陸だと考えたからだ。

ギャオスが渡り鳥に似た特性を持っていることは、以前に解析した遺伝子情報から判明している。

まず先に大規模な発生源を叩かなければ全滅させることは難しいだろう。

その後に各地に分散したギャオスを始末すれば何とか成るはずだ。

その考えの元、俺はギャオスが異常繁ら殖している大陸を見つけ出し、そこに向けて飛翔している最中だった。

『それにしても、この数は異常だろ・・・』

探知したギャオスの数は百体にも及ぶ。

しかもどれもがギャオス・ハイパーの成体と来た。

それだけでも対処に困るっていうのに、大陸に近付くにつれ新たな問題も出てきた。

『っ！？まただ・・・』

先程から突然ギャオスの反応が消えるといった謎の現象が立て続けに起こっている。

その近くではギャオスとは明らかに異なるマナの波動を持った存在が確認出来ているが、恐らくコイツがギャオスの反応消滅と関係しているのだろう。

ギャオスと敵対する生物・・・か、まさかガメラなのか？

ガメラの存在があり得ない話ではないことはギャオスの存在から分かっていた、その戦闘能力もギャオスを全滅させることに大きく貢献してくれるのは明白、だが、問題は果たして接触した時にこちらが敵として見られないかだ。

こればかりは実際に接触してみないと分からないが・・・、たぶん大丈夫だろう。

元々は同じギャオスを倒すために創られたもの同士だし。

劇中のイリスはガメラを倒すために人を襲っていたから倒すべき敵と判断されたのだ。

俺はそんなことしてないからな！

リコットに関しては怪しいところだが、・・・あれは彼女の意志だ。

もしそれでガメラと敵対することになったとしても、俺は彼女の決意を護るためにガメラと戦ってやる。

俺はガメラとの対決も視野に入れ、魔力を練り上げながら近くに感じるギャオスの反応へ向けて速度を上げるのだった。

◇

結論から言おう、ガメラが仲間に加わった。

自分でも何が起きたのか最初は分からなかったし、今も頭の整理中なのだが、簡単に言えばその通りなのでそうとしか言えない。

隣に並んで飛行するガメラの姿をちらりと覗き見る。

体の造形は平成ガメラシリーズ二作目のもので、今はウイング状に平たく伸ばした腕と頭を出したまま足に当たる部分からジェット噴射で空を飛んでいる。

この辺りはイリスである自分と似通っていた、やはり同じ構造なのかねぇ。

『ん？何だ？』

『いや、なんでもないさ』

『そうか』

基本的に口数の少ない奴だが、話してみたら悪い奴じゃないのは分かった。

今はギャオスについての詳しい話を聞くために彼の拠点としている場所に向かっているところだが、まだ時間がかかりそうなので、先に何でこんな自体になっているのかを説明しておこう。

ことの始まりは大陸に近付いて際に、十体近くのギャオスの群相手に苦戦を強いられているガメラを見つけたところまで遡る。

俺はすぐさまその戦闘に介入した。

もちろん、攻撃する対象はギャオスだ。

今は敵味方の判断が出来ないガメラの存在はひとまず脇に置いておき、先手必勝、今まで飛行のために二つに裂いていた四本の触手の内二本を元に戻し、その先端をギャオスの集中している場所に向けて重力波砲を叩き込む。

空間をねじ曲げて直進する極太の重力波が瞬く間に数体のギャオスを巻き込み、その体を引きちぎりながら巨大な挽き肉へと変えていく。

残ったギャオスがこちらの存在に気がつき、怒りの瞳と奇声を向けてきたのにないはずの頬がつり上がるのを感じ、即座に残りの触手も元に戻して本格的な迎撃体制へと移る。

そして、注意を逸らしたギャオスを放っておくほどガメラも甘くはない。

すぐさま必殺の火球を発射して一匹を葬りさり、一気に攻勢に転じる。

こちらに向かってきたのは三匹、ガメラに向かったのは二匹。

どうやら、ガメラよりこちらの方が危険だと判断したらしい、嬉しいねぇ。

ジェット噴射だけでは細かい軌道を取かれないが、舐めてもらっては困る、俺には全方位対応の触手と超音波メスがあるのだよ。

向かってくるギャオスに超音波メスを放つと一匹は対応仕切れずにバラバラになるが、それを見越していたのか残りの二匹が二手に分かれて左右から超音波メスを発射してくる。

慌てずに魔力を使った空間歪曲場を自分の周りに展開してその攻撃を防ぎ、お返しとばかりに左側の一匹に対し超音波メスを十字状に発射して肉の塊へと変える。

残った右側の一匹は自分以外の仲間がやられたのに怖じ気付いたのか、こちらに背を向けこの場から逃げ出そうとした。

残念だが、逃がすつもりなんてない。

逃げるギャオスの胴体に、伸ばした触手を巻き付け、暴れる体を近くまで手繰り寄せたと同時に、手甲に槍状のデルタレイを纏わせ、ギャオスの頭に向けて容赦なく突き刺す。

頭の半分以上を高温の槍で抉り取られて活動を止めたギャオスを放り投げて、ファイガの魔法でその体を吹き飛ばすと、先程からこちらを観察するように眺めているガメラへと体を向ける。

お互い無言で見つめ合うこと数秒だったか、突然頭に声が響いた。

『私と同じ力を感じる・・・、お前は何者だ?』

『な、喋った!?』

つまり起きたことを簡単にまとめると、苦戦しているガメラを助けたら普通に話しかけてきた、以上説明終わり。

いや、まさかガメラが喋るとは思わなかったので最初は凄い混乱したが、幸いにもあちらに敵対の意志は感じられなかったため、自分の目的や生まれについてを話してみた結果、今に至るというわけだ。

『ついたぞ』

調度いい時間潰しを終える頃に彼が拠点とする場所に辿り着いた。

一息着いた俺たちはそこで情報を交換し合うことにしたのだが、それにより今まで謎だったギャオスの正体がようやく判明した。

彼の話では、ギャオスは超古代文明の一部の科学者の手により、人間がマナを使いすぎることで発生する生態系の破壊を危惧して生み出された超遺伝子獣らしい。

だが、予想を大きく上回る驚異的な成長速度で人の手を放れたギャオスは、最終的に人間や他の生物を餌にする特性ばかりが強く出てしまい、逆に生態系を破壊する存在へと成り果ててしまった。

なるほど、ギャオスが人を主食とするのもマナの減少に合わせて発生するのも、元々マナの減少に対する抑止力として創られた存在だったからか。

納得した様子の俺に対し、彼は自分たちの体についても話してくれた。

ギャオスに対抗するために超古代文明によって器にマナを集めて創られたところまでは自分の知識と同じだったが、彼はそれ以外に人の魂が必要だと言った。

なら、人の魂が存在する俺は正しくガメラと同じ守護者だということか？

この体に生まれた瞬間、既に邪神とは別の道に分かれていたんだと理解した瞬間だった。

それから俺は彼と共にギャオスの殲滅に乗り出し、数ヶ月の間戦い抜いた。

その日々の中でいつしか彼とも友人と呼べる関係になり、移動中や休息中にはいろいろなことを語り合った。

大陸のギャオスを全て殺し尽くした後は、散らばった群を追って世界中を飛び回り、その使命を果たすことに力を注いだ。

そして今、全てのギャオスを殺した俺は数ヶ月共に過ごした相棒と別れの言葉を交わしている。

『本当に戻るのか？』

『ああ、あそこが俺の家だからな』

『む、だが・・・』

『・・・はあ、お前も困った奴だな。そんなにあの話しが気に入ったのか？』

『し、しかたないではないか！私の時代にはあのような物語は存在しなかったのだ！』

彼が別れを惜しんでいるのは休息中に話して聞かせたアニメや特撮の物語にえらくハマってしまったからだ。

身も蓋もない言い方をするならば、中の人の時代にはその手の物語が存在しなかったらしく、日本のサブカルチャーがそんな彼の心に直撃したらしい。

超古代人すら惹き付ける日本の文化凄いです。

と、なんか俺もだいぶ記憶が戻ってきたせいか、口調とか少し変わったんだよねぇ。

それでも俺の星と人を護るって守護者としての在り方は揺るぎないがな。

思い出した記憶も前世の漫画やアニメやゲームとかに関するものだけだし。

魔法のイメージ作りに役立つから文句は言わないが、明らかに作為的なものを感じるのは仕方ないだろう。

そんな偏った記憶から選び出した物語の数々が彼の心を掴んでしまったわけだ。

気まずい沈黙に耐えられなかったあの時の自分に自重しろと言ってやりたい。

正直、ＣＬＡＮＮＡＤに号泣するガメラとか見たくなかった・・・

結局、偶に彼の寝床へ遊びに行くことを約束させられた俺は、その大きい図体に似合わない可愛らしい手の振り方をする彼の姿に、二度とまともにガメラを見れないな、とか思いながら背を向けーーーー

突然のガラスが割れるような音と共に空中に現れた馬鹿でかいに穴に吸い込まれた。

『って、なんじゃあそりゃあああ！？』

『な、私もなのか！？』

ついでに居合わせたガメラも巻き込んで、数秒後、二体を飲み込んだその穴はやっと塞がり、普段と変わらない空がそこに戻る。

この日、世界から二体の守護者が姿を消した。

守護者との邂逅、旅立ちの時（後書き）

ガメラはこれからも旅のお共になる予定。イリスとガメラのタッグとか個人的には胸が熱くなります。

ちなみにガメラの遺伝子情報は本人の同意の元、ちゃっかり採取しているイリス様。

即座に熱エネルギー変換炉（プラズマ変換炉）を体内に創り、プラズマ火球は実装済み。

体内のマナ生成器官と組み合わせればガメラのウルティメイト・プラズマと同じように、充填したプラズマエネルギーを胴体の発光体から直接発射することも可能。

塩の大地（前書き）

はいはい、お決まりなＭＵＶ－ＬＵＶですよ。

塩の大地

地球外起源種ＢＥＴＡ、それがこの世界の人類が直面している驚異の名前だ。

数十年前に突如人類の前に現れた彼の存在によって、地球の大地や母なる海は汚染され、ユーラシア大陸の大部分は更地と化して今やＢＥＴＡの採掘場となり、人類はＢＥＴＡ戦争前と比べてその人口の約六割を既に失っていた。

人類は戦術機と呼ばれるロボット兵器を用いてこれに対抗したが、相手の圧倒的な数の力の前に最早敗戦の色を濃くしていた。

そして、２００１年１２月２４日、国連はバビロン作戦の発動を決定する。

それは全人類で選抜された約十万人を地球から脱出させ、大量の五次元効果爆弾Ｇ弾でＢＥＴＡに最終決戦を挑む、といった正に最後の手段と呼べる内容だった。

バビロン作戦の発動に伴い、第一段階として移民船団に選抜された約十万人が政府より発表され、各地で様々な騒動や暴動を巻き起こすことになる。

一年後、軌道上に存在する宇宙船の完成に伴い選ばれた人々を乗せてバーナード星系に旅立つ移民船団を見送った後、地球に残った大

多数の人々はＢＥＴＡとの最終決戦に向けて戦力を蓄えることを視野に入れ、ＢＥＴＡとの積極的な戦闘を避けて拠点防衛を主としてその日が訪れるのを待った。

十数ヶ月後、ついに人類の運命を決める２００４年２月２３日が訪れる。

人類はバビロン作戦の第二段階、作戦の本番であるＢＥＴＡに対する最終決戦を決行。

ユーラシア大陸に存在する全てのハイヴに対して一斉投下されたＧ弾は、大陸の全土を覆い隠すように発生した黒点の数々に大量のＢＥＴＡを飲み込みながら、地表構造物を一掃した。

ついに人類はユーラシア大陸を犠牲にして、ＢＥＴＡに勝利する可能性をその目にしたのだ。

追い詰められた人類が打った起死回生の一手、バビロン作戦は成功目前だと誰もが考え、残ったＢＥＴＡの殲滅に身を乗り出そうとした。

だが、現実はそんなにうまくはいかなかった。

Ｇ弾の集中運用が大規模重力偏差という、未曾有の大災害を引き起こしたのだ。

大海崩と呼ばれた海水の大移動に伴いユーラシア大陸は水没、剥き

出しになった大洋の海底は干上がり塩の砂漠へと変貌。

大気圧の激変により安全だったはずの後背地は壊滅、重力異常は人工衛星網を破壊し、原因不明の電離層異常は大気圏内通信を分断した。

後にも先にも人類史上最大の災害となるだろうこの事態の唯一の救いは、全てのＢＥＴＡを大津波が海底に浚っていったことだろう。

・・・結果から見れば確かに人類はＢＥＴＡに勝った。

だがそれは余りにも大きすぎる犠牲を払ってのものだ。

ユーラシア大陸はもちろん、近隣の日本列島やアフリカ大陸、インドネシアの諸島の数々には数十メートルの大津波が押し寄せ、その全てを海の底にしてしまった。

残されたのは重力異常で生態系の失われた海に大洋が干上がって出来た塩の海と、それに続くようにして残った北アメリカ大陸と南アメリカ大陸のみ。

その土地にしたって大気圧の激減に見舞われ壊滅状態で、半分近くが塩の平原と化しまともに人が暮らせる環境ではない。

塩の海や塩原から風に混じって飛んでくる塩分が作物を駄目にしてしまう過酷な現実がそこにはあった。

この大災害で失った詳しい人口は確認出来ていない。

生き残った人々は生きるために移住可能域を目指し、余力ある者たちは生存者を探すことに専念した。

人々はこの変わり果ててしまった大地で明日を生きようとしていたのだ。

だが、全てが変わってしまったＧ－Ｄａｙから四ヶ月後、２００４年６月、人類の前に再び悪夢が蘇る。

それは深海に没したはずのＢＥＴＡ。

今、人類は過酷な自然環境に残された僅かな移住可能域を守るために、激減した戦力を以って絶望的な戦いの再開を余儀なくされていた。

◇

『またか、学習しない奴らだ』

そんな声と共に見るだけで相手に嫌悪感を与える醜悪な生物の集団に向けてプラズマ火球が放たれ、着弾と同時に数体をまとめて吹き飛ばしその体を焼き尽くす。

炭化した仲間の残骸を吹き飛ばし、地響きと共に突撃してきた装甲をまとった数体の個体に対し、ガメラは分かっていたと言わんばかりに既に準備を終えていたプラズマ火球を連続で撃ち出した。

一直線に突進してきた数体が凝縮されたエネルギーの火球の直撃を受けて、その圧倒的な熱量によって瞬時に燃焼する。

それはここ数日で見慣れた一方的な迎撃戦だった。

三十分後、謎の生物を全て燃やし尽くした彼は相手の増援がないことを確認すると、身を翻して自分が守り抜いた大地【アトランティス】へと帰還する。

そこは大海崩によって太平洋に浮上した小さな大地だったが、塩の砂漠と化していた他の大地とは異なり、生物が生きることが出来る土の色が存在していた。

そして、あの日から三ヶ月を経て、今では僅かだが緑の命が大地に芽吹いていたのだ。

だが、とある事情から先の謎の生物にこの場所がバレてしまい、数日前から何度も小規模な群による襲撃を受けている。

”彼ら”がＢＥＴＡと呼ぶその生物はこの星の生態系を破壊する討つべき存在、俺たち守護者が滅ぼすべき害悪だった。

そんな奴らがこの環境再生のテストプランと呼べるアトランティスの場所を見つけた原因となったのが――――

「凄い・・・、こんな栄養状態のいい土なんて始めてみた・・・」

「おい、あんまりそいつに近づくなよ！」

「これは・・・成長を促進しているっていうの・・・？でも、だとしたら――」

「おい！聞いてるのか！・・・ああ、もうっ！またいつものやつなのかクリス！？」

地面に触手の先端を突き刺して日課となっている大地へのマナ供給を行う俺の近くで、マナを含んだ土を片手に何やら思案する女性とその近くでこちらを警戒するように銃口を向けるロボット。

彼らは数日前に生き残りを探していた俺が偶然探知した奇妙なマナの波動の場所で、その波動を放つ生物――ＢＥＴＡに襲われていたところを助けた人々の内の二人だ。

――――三ヶ月前、突然この世界に放り出された俺とガメラな彼は耳を塞ぎたくなるような星の悲鳴を聞いた。

星の惨状をマナの異常な乱れと大海の重力異常から理解した俺たちは、アトランティスと名付けた大海に隔離された小さな大地で環境の再生を試み始めることになる。

その作業がある程度落ち着いたのが数日前、そこで俺は彼に島を任せ、この世界に来た時から気になっていた生物の生き残りを探しに、マナの循環異常のせいで探知能力がまともに使えない状態で島の近海を飛び回った。

そしてあの場面に遭遇し、彼らを守護者として放っていくわけにもいかず、結果的にアトランティスへと連れ帰ってきたわけだ。

・・・もちろん島に連れて来た当初は露骨に警戒されていたが、こちらが彼らに対し敵対行動を取らず、また特に干渉しなかったせいか、少なくとも自分たちに害なす存在ではないとだけは理解されたらしい。

それで、助けた数十人の人々だが、今は生態系の再生が成功して最低限だが人が住める程度の環境を取り戻した島の中心部に、一緒に運んできた戦艦を中心にしたキャンプを形成して暮らしている。

彼らは長い漂流生活で食料が尽きかけていたのか、今では島にあるマナの回復を狙って創ってみた世界樹の実を、恐る恐るといった感じに口にしている様子を目にすることがある。

まぁ別によほど食べ過ぎなきゃ体に悪いものじゃないし、栄養満点だろうから逆に積極的に食べて欲しいくらいなので問題ない。

飲み水に関しても島の中心部分に植物に供給するために大きな湖を作っているので、それがあれば当分は不足するような事態にはならないはずだ。

もちろん水質には常に注意しているため、少しの手間で飲料水として使えるくらいに綺麗な水で、恐らく今の世界で一番安全な水だと言っても過言ではないだろう。

まったく、マナ操作とマナ生成のコンボは凄まじいな。

三ヶ月前は塩の砂漠だった大地が今では僅かだとしても生態系の回復に成功して、こうして生物が生きられる環境を作り出せているのだから。

既に土俵が出来ている現状から見て、今後の生態系の再生は今より更に速していくことだろう。

今の内に新しい植物を植え付けるために種や苗木を用意しとかないとな・・・

あぁそれにしても――

「ほら、時間だクリス！船まで帰るぞ！」

「嘘・・・、これってまさか――」

「クリス！クリスティイイナァッ！！」

「ティーナは禁止っ！」

「聞こえとるではないかぁ、ほら帰るぞ我が助手クリスティーナよ！」

「助手でもないしクリスティーナでもないわ！だいたい岡部はただの衛士でしょ！何度同じこと言わせるのよ！」

「ああ、そうだったな・・・、んゞん゛！それはお前が返事をしないからではないか！・・・それよりも時間だぞ」

「え？もう？・・・もう少しだけ駄目？」

「駄目だ。俺がミスターブラウンに怒られてしまうではないか！あの人は時間にうるさいんだぞ！」

「いいじゃない怒られなさいよ」

「おまっ！？」

「ふふ、冗談よ」

「な、なんだ冗談か・・・」

「半分はね」

「おい！」

「あはは！」

「ぐぬぬぬ、貴様俺をからかったな。助手の分際で生意気な・・・、はぁとにかく早く戻らないと皆が心配する」

「ふふ、ええ、分かってる。でも――」

「分かっている。サンプルを持ち帰る時間分くらい怒られてやるさ」

「・・・ありがと」

「・・・ああ」

「「・・・・・・」」

「ほ、ほら何をぼさっとしている！早くサンプルを回収しないか助手よ！」

「そ、そうね！さっさと回収しちゃわないと岡部がボコボコになっちゃうかもしれないものね！」

早く帰ってくれねーかなこの二人。

独り身にはその空気キツいんだよ、お前等が夫婦なのはよく分かったからさ！

くうぅ、俺もそんな存在が欲しいなあ・・・

『私がいるではないか』

『いや、そうだけど。出来れば男はちょっと・・・』

『何を言っている、私は女だぞ？』

『うそぉおおお！？』

驚愕の新事実、ガメラの中の人は女の方だった！！

――――だが、ガメラだ。

『まったく意味ねぇよ・・・』

『む、そうなのか？』

――――そうなんです。

塩の大地（後書き）

やってしまった・・・、実は作者は数年前にオルタネイティブ、発売当初にクロニクル０１を一回やっただけで、クロニクル０２はやってません。しかもどっちも手元にないと言う現状。

でも、やりたかったんだよ！

個人的に主人公が怪獣ならマブラヴは外せないと考えていたし。

だが普通にオルタネイティブだなんてつまらないし、ありきたりだとか考えたのですよ。

その結果、何をトチ狂ったのかＴＨＥ　Ｄａｙ　Ａｆｔｅｒの塩の砂漠な世界を選んでしまった・・・

そんなわけで、中途半端に投げやりな状態で次の世界へＧＯ！がほぼ決まってしまっている《Ｄａｙ　Ａｆｔｅｒ編》、何とか終わらせられるように頑張ります！

彼女が見た世界（前書き）

今回は本編の裏側、助けられた彼女の視点の話です。独自設定や独自解釈あり。

彼女が見た世界

その日、私たちは希望と絶望を知ることになった。

ついに人類の滅亡がカウントダウンされ始めたＢＥＴＡ戦争に対して人類が選択した最終決戦、バビロン作戦はその日、計画の本懐を遂げることになる。

私、牧瀬紅莉栖は若くして帝国大学を飛び級で卒業した所詮天才と呼ばれる種類の人間だった。

父が唱えたとある論文に加え母親がアメリカ人だったために帝国での立場があまりよいとは言えなかった私は、同じ大学の先輩であり当時何かと騒がれていた香月博士の推薦で彼女を中心として進められていたオルタネイティヴ計画の第四計画に参加することになり、帝国から国連へとその身を移すことになる。

私が配属されたのは横浜ハイヴ後に新たに建造された横浜基地、そ

こで知らされたオルタネイティヴⅤ、通称バビロン作戦の概要とその真の目的。

それは巨大宇宙船を用いて選ばれた僅かな人々を宇宙に逃がし、Ｇ弾の集中投下による全ハイヴの殲滅を謀るといった内容だったが、主軸はＧ弾使用にあり、移住作戦は国連や帝国等に対して行う表面上の計画であることは明白だった。

簡単に言えば移住計画はおまけみたいなもので、彼らにとって第五計画はＧ弾の有効性を示して大きな発言力を得ることが目的となっていたのだ。

加えて移民先のバーナード星系にＢＥＴＡが存在しないと保証されているはずもなく、提示された情報はどれも予想の範疇を出ない。

最悪なのがＧ弾を使用した際の環境への影響を一切考えていないその思考。

横浜ハイヴ攻略の際に使用されたＧ弾が重力異常で自然が育たない不毛の大地を残したと言うのに、自国がＢＥＴＡの驚異に晒されていない彼らにとってはそんなことは問題とならないらしい。

話しを聞けば聞くほどアメリカの都合がいいように組まれた計画だった。

それを良しとしないＧ弾反対派が今の第四計画を押したらしく、話しを聞かせてくれた香月博士もアメリカの勝手にはさせないと獰猛な笑みで語っていた。

私を推薦した理由を聞くと、香月博士は私の脳科学に関する知識を買って帝国から引き抜いたらしい。

「あんたの力はあんな場所で腐らせておくにはあまりに惜しいのよ。ここで力を発揮しない」

私がハーフと言う事実だけで評価されなかった私の論文を手にして初対面の博士が言った台詞だ。

その切っ掛けとなった論文のタイトルは“人間の記憶のデジタル化”。

私はそれを発展させる形で第四計画に着手することになる。

横浜でも帝国での生活で出来上がってしまっていた“誰にも頼らない牧瀬紅莉栖”の仮面のために、周りと上手くいかずにいた私はとある出来事で当時衛士に成り立てだった岡部と知り合い、なぜか執拗に絡んでくる岡部に付き合っている内にいつの間にか岡部たちを通して周りの皆と打ち解けていたのだった。

岡部や橋田とはその時からの付き合いだ。

そこに任官したまゆりや漆原さんを新しく加えて、岡部たちの部隊

はますます賑やかな横浜基地の名物部隊となっていく。

私は研究で行き詰まった時や一息つきたい時などに、岡部たちと一緒に過ごす時間が増えていった。

普段は意味不明な言動が多い岡部だけど、若さを理由にいわれのない中傷を受けて弱音を見せたくなくて何事も無かったかのように振る舞っていた私を見た時――

「・・・何があった紅莉栖」

「はぁ？突然何言い出すのよ。別に何もないわよ」

「嘘だ」

「・・・嘘じゃない」

「いいや、俺の目は誤魔化しきれない。俺には分かる。牧瀬紅莉栖は嘘をついている」

「・・・・・・」

「何があった？」

誰よりも先に私の嘘を見抜き、いつもは口にしない私の名前を口にした今までに見たことがない真剣な眼差しで見つめてくる岡部に、私はなぜか彼に話さなくてはいけないと感じて、最初は平気な顔で、だけど途中からは泣きながら帝国で受けたことについても話してい

た。

その間岡部は何も言わずに黙って話を聞いてくれて、私が話し終わると――

「頑張ったな紅莉栖」

それだけ言って優しく抱きしめてくれた。

その日、私は岡部の予想以上に大きかった胸の中で、何年も我慢し続けていた弱さを吐き出したのだった。

後日、私に中傷を言ってきた人たちがばつが悪そうにしながら私の所へ謝りに来て、なぜか岡部は反省房に閉じ込められていた。

私を捜していたまゆりに岡部がやったことを聞かされ、急いで反省房に向かった私はいつものように自分をクリスティーナと呼んでくる岡部と普段通りお決まりな言い争いを交わし、なんだか心配したのが馬鹿らしくなって扉越しに岡部のやったことを笑ってやった。

「でも・・・ありがと」

「ふん、何がだ？」

「さっき私に謝りに来た。あれ、岡部でしょ？」

「さて、なんのことか分からんな」

「まゆりに聞いたのよ」

「おのれ、まゆりめぇ余計なことを・・・」

「あんたねぇ」

確認するまでもなく、岡部は岡部だった。

あの時の格好良かった岡部はどこにいってしまったんだろう。

と、そんなことをいつの間にか考えている自分に気づいて、真っ赤になって否定するように頭を振った。

今思うと自分が岡部を気にしていることを自覚したのは、その時だったのかもしれない。

そんな岡部との付き合いは、あのバビロン作戦が引き起こした大災害の後もこうして続いている。

私が横浜に来て一年後、第五計画の発動に伴い第四計画は破棄され、第四に関わっていた多くの科学者や衛士はそれぞれの研究所や部隊に戻り、横浜基地はその規模を縮小されることになった。

私は帝国に戻っても居場所がないため、岡部たちがいることもあってそのまま国連の技術官として横浜基地に留まったのだが、それから二年に渡り岡部たちは国土防衛のために何度か戦場へと赴くことになる。

そしてバビロン作戦が決行されたあの日、私は技術官として岡部たちの部隊や他の横浜の部隊と共にＧ弾投下後の生き残ったＢＥＴＡの殲滅を行うための作戦に参加、私たちの乗った大型戦術機空母は発生した大津波に襲われた。

生き残ったのはたったの数十人、搭乗員の多くが体を激しく打ち付けられて死んでいた。

それから半月に渡り海を漂流した私たちが辿り着いたのは塩の大地。

運良く発見した座礁していた死体だらけの戦艦から生き残りと物資を回収して、長距離通信が回復するまでの辛抱だとどうにか食いつないでいた時、全滅したはずのＢＥＴＡが現れたのだ。

私たちはこれだけの代償を払っても全滅しなかったＢＥＴＡに対して悪態をつきながら、艦砲射撃もなく船に乗せられた限られた弾薬を用いて戦いを挑んだのだが、次第に敵の数に押されていく。

そこに現れたＢＥＴＡの援軍、誰もが死を覚悟した、その時だった。

――――あれが現れたのだ。

その姿を見て誰もが絶望に染まっただろう。

私たちをＢＥＴＡと挟むようにして上空から現れたのは大きな膜の様な羽が生えた銀色の体を持つ巨大な生物。

大地に降り立つその姿はある種の神々しさすら纏わせており、私たちの目を釘付けにした。

ＢＥＴＡですら動きを止めて突如現れたその存在を注視し、生存を賭けた戦場にあり得ない静寂が世界を支配する。

その場は完全に銀色の生物が支配していた。

銀色の生物はゆっくりと静止した世界に降り立つと、特徴的な頭を動かし戦術機、ＢＥＴＡ、空母といった順に見つめた後、肩から生えた触手状の器官の先端をこちらに向けて――――、そこから放たれた光の矢がＢＥＴＡの一角を貫いた。

大地を裂くように一直線に放たれた光はそこにいたＢＥＴＡをバラバラに切断し、それと同時に硬直していた戦場へ動きが蘇る。

「ば、ばかなっ、レーザーだと！？」

「まさか新種のＢＥＴＡか！？」

「ちょ、これやばくね？」

「ピンチだよー」

レーザーの怖さを十二分に知る私たちが慌てふためく中、ＢＥＴＡが動いた。

一斉にその体を銀色の生物へ向け、こちらを完全に無視して突撃を始める。

そう、ＢＥＴＡはその存在に対して攻撃を仕掛けたのだ。

予想外の事態に唖然とする私たちの前で銀色の生物は体の周りに薄い黒の半球を作り出し、そこに触れたＢＥＴＡの体を瞬時に肉の破片に変えていく。

「嘘・・・、重力偏差・・・？」

その生物の周りに展開された黒い半球はあの大災害を引き起こしたG弾と同じ性質のものだった。

銀色の生物は自分を守る絶対領域の中から触手を外に出してレーザーでBETAをなぎ払い足止めすると、その先端に二つの巨大な火球を作り出し撃ち放つ。

放たれた火球は仲間の死骸で足止めされていたBETAの集団に直撃し、その巨大な炎で全てを焼き払ってしまった。

・・・BETAが全滅するまで約十分、まさに圧倒的としか言えない戦闘力だった。

誰もが目の前で起きた出来事を理解出来ずに硬直する中、BETAを全滅させた存在が私たちへと体を向ける。

はっとして身構える私たちに対し、相手が取った行動は重力操作によるこちら側の行動の完全掌握。

銀色の生物は高度な重力操作を用いて母艦と生き残った戦術機を全て重力の檻の中に閉じ込めその場に浮かばせたのだ。

やはり敵だったのかと誰もが叫ぶ中、私は一人そうと断定するのは

早計だと考えていた。

明らかにこちらを気にした戦い方や状況を理解した上で行動したのではないかと思わせる素振り。

そして何よりこちらに全く影響を出さずに重力操作を行っている事実。

味方ではないが敵だと断定するには早すぎる。

恐らく何か目的があるはずだ。

そしてその考えは当たっていた。

私たちが海を跨いで連れてこられたのは僅かだけど緑が残るこの島。

あの銀色の生物は私たちをその中心部に降ろし、それからはこちらに干渉してこようとはせずに島の中を一定の間隔で徘徊していた。

あの生物の意図はまだ分からないが、私たちは数ヶ月振りに見る緑を前に我慢なんて出来るはずもなく、船から飛び出して大地を満喫することになる。

そして島に来てから数日たった今、暫定的だが敵対の意志がないと判断された銀色の生物――銀甲冑に接触を試みたのだった。

彼女が見た世界（後書き）

分かる人は意外と多いかな？牧瀬紅莉栖やら岡部（フルネームは岡部倫太郎）はＳｔｅｉｎｓ；Ｇａｔｅからの参入。作者が最近見ていたアニメがこれで、登場人物のキャラが好きなので使わせて貰いました。

詳しい設定は特になし、あるとしたら、オカリンがＧ弾大量使用の際に発生した時空の歪みとあれの使用のせいでこっちに来ちゃったってことくらいです。

でも主役はイリスなんでそれが生かされる展開は・・・あるのか？

あと、イリスの腕の槍はパイルバンカーではなく、伸縮自在の槍だと教えてくれた方がいましたが、すいません。描写してみるとまんまパイルバンカーになっていました。

ですが、あれは本人がパイルバンカーの感覚で使っていると思ってもらえれば幸いです。

過ぎる日々、交流する守護者（前書き）

この世界の人類って、何人くらい生き残ってるの？数千人？数万人？そもそも一般人はどうやって大津波から生き残ったんだ？疑問だらけで困りますわ！

結論、運良く生き残った。

過ぎる日々、交流する守護者

この世界に来て八ヶ月がたった。

努力のかいあってか島の中心部はだいぶ緑で覆われてきたが、残念なことに未だ連れてきた人間以外に生物の影はない。

生態系を形作るのに必要不可欠な微生物や昆虫、動物などがいない現状では、それらの役割を大地や大気中に存在する大量のマナを使った擬似的な循環状態で補っている。

本来ならあまり褒められた手ではないため、早くどうにかしたいものだ。

そうそう、大地に根を張る植物をどこから持ってきたかだが、俺の中に記憶されていた遺伝子情報を元にマナで種を創って育てた。

直接成長した木を創らないのは内包されたマナが大地に馴染まず、島の大きなマナの循環に加わることが出来ずに枯れてしまうからだ。

そうならないために種や苗木の状態から大地のマナに馴染ませているのだ。

成長した木の状態でも定期的に直接マナを与えることで枯れさせないことも出来るが、俺の存在に依存したものなど意味がないのでやらない。

成長した状態で創った世界樹に関してはマナの回復が目的であり、その役目が終わった際には枯れてもらわなくてはならないので問題ない。

植物に関しては村にいた時に触手の機能を試した際、情報を読み取るのが予想以上に楽しくて森中の植物に触手を突き刺していたし、ギャオス退治に世界を回った時にも暇を見て回収してたから、かなりの数と種類の情報が体に保存されているので困らなかったのだが、動物や昆虫といった生き物に関しては抵抗があって全く回収してなかったため情報がない状態なのだ。

遺伝子情報がなければ創ることが出来ないのは当たり前だ、さすがにそこまで万能じゃない。

世界樹はあっちの世界で偶然見つけた遺伝子情報から復元した品種だし。

この問題に関してはアメリアと話し合って解決案を探している最中だ。

あ、アメリアと言うのは――――

『もどったぞ』

『お帰り、どうだった？』

『うむ、前回より少なかったな』

『ふーん、さて数に限りがあるのか何か考えでもあるのか・・・、君はどっちだと思う？』

『それなんだが・・・、奴らのマナの波動、あれは人工的に造られた生物のものだ』

『やはり・・・、ギャオスと同じか・・・』

『ああ、だが奴らからは意志を全く感じない。恐らく生物兵器の類だろうが・・・、そうだとすると――』

『指令を出してる奴がいると？』

『うむ、可能性は否定出来ないはずだ』

『だとしたらその目的は何だ？人間か、それとも島そのものか？』

『あるいは両方かもしれんな』

『結局目的については何も分からないままか・・、だとしたら、今は守りに徹するしかないな。頼んだぞアメリア』

『うむ、島の守りは任せろ。イリスは安心してやるべきことをなすのだ』

アメリアと言うのはガメラの中の人の名前だ、以前に男だと思って

いたことを話した際に少し不機嫌そうな彼女に名前を教えてもらった。

いままで君とかお前とかで表現していたため彼女も特に気にすることなく、双方とも誤解したまま過ごしていたらしい。

話し方が堅苦しかったしガメラのイメージから当たり前のように男だと思っていたから純粋に驚いた。

ま、これと言って関係に変化はない、むしろ今まで以上に話す機会が増えたくらいだ。

そんな彼女には島の再生で手が離せない自分に変わって、島に侵攻してくるＢＥＴＡの相手をしてもらっている。

最初の頃は人間たちも慌てた様子でロボット（戦術機というらしい）で迎撃に出ていたのだが、今はとある理由とアメリアの圧倒的な戦闘能力を目にしたことで、遠目での静観に落ち着いていた。

そのとある理由と言うのが、何と驚いたことに俺たちが普段意志疎通に使っているテレパシーを、受信することが出来る人間が出現したことだ。

彼女の名前は椎名まゆり。

ある日ふらっと俺の所にいつも来る例の二人組（確かクリスと岡部と言ったか？）と一緒に現れて、何を思ったのかいきなり二人について話し始めたものだから、暇潰しにと聞いていたわけだがやたらと話しが噛み合うので、確かめてみたら聞こえていることが判明した。

その後すぐに彼女の体をよく調べてみると他の二人と比べて体内のマナの量が明らかに多かったので、恐らくそれが彼女の体に何らかの影響をもたらしたのだろう。

まゆりに思い当たる節がないかと聞いてみたところ、なんと彼女は世界樹の実の味がたいそう気に入り毎日のように食べ続けていたらしい。

まじか、自分で進めてみてあれだが、あれって凄い微妙な味だから手を出しても一度や二度だと思っていたんだが・・・、それにすぐに人間用の食糧にと栄養価の高い果実系の木を創ってたから皆そっちを食べてたし、好んで食べる物好きがいるとは予想外だ。

でもなるほど・・・、なら彼女の体にマナが多いのも理解出来る。

世界樹はマナの発生源だしな、それに実る果実が内包しているマナは他の物より圧倒的に多い。

普通マナは生物の体になかなか蓄積しないから問題ないはずなんだが、彼女の場合、通常ではあり得ない大量のマナが含まれた実を毎日食べ続けたせいで体にその一部が定着してしまったようだ。

そのマナが体内のマナ循環に影響を与えて、偶然にも特殊な能力を発現させたのだろう。

後から判明したことだが、彼女がマナに馴染みやすい体質だったのも大きな理由の一つだった。

とりあえず彼女の体には問題がないと確認した後、これ幸いにと彼女を通して人間側とのコミュニケーションを謀ることにした。

結果、こちら側はＢＥＴＡと三十年にも及ぶＢＥＴＡ大戦の歴史、バビロン作戦についての詳しい情報を得て、あちら側には俺たちが遙か昔に超古代文明によって創られた星や人を護る存在で、今回の大規模な生態系の破壊によって目が醒めたという情報が与えることになった。

まぁ俺が話した内容は一部嘘が混じってたが、異世界から来ましたとか言うよりは余程理解されやすいだろう、それ以外は本当のことだし。

で、そんな好条件な未知との遭遇を果たした人間側は俺たちとの関係の維持と恐らく情報収集を目的とした特使として、クリスや岡部と言った見慣れた者と他数人を俺の所に送り込んできた、もちろん通訳担当のまゆりもいる。

こちらとしては出来ることなら相互理解を深めたかったので特に拒

む理由はない、むしろマナ供給のため同じ場所に長時間拘束される身としては話し相手が出来て嬉しいくらいだ。

アメリアとも話すことはあるが彼女の場合、島の防衛のためにあまり長い時間話せないため、いつも島の今後についてやＢＥＴＡについての話しで終わってしまい、それ以外の何気ない会話というのが出来なかったのだ。

元人間としてはそういった日常会話的なものが恋しくなるのは仕方のないことだし、彼ら個人を見てもなかなか個性的な者ばかりで、そのやり取りを見ているだけでもあきないからな。

さすがにまゆり一人で通訳をするのは大変そうなので、彼女の許可の元その体液を分けてもらい、解析して得た情報から即席の翻訳機のような物を創り彼らに渡した。

その時の彼らの様子だが――――

クリスは俺のやったことに驚愕を隠しきれずに詳しい説明を求めてきたので、かいつまんで教えたら、急に頭を抱えて何やらぶつぶつ言いながら唸り始める。

岡部はそんなクリスとは裏腹に手元のバッチ状の翻訳機を眺めながら何やら感傷に浸っていた。

彼は翻訳機を創る際にその形のイメージを提供してくれた人物なので、あのバッチに何らかの思い出でもあるのだろう、イメージを読

み取るときに強い感情を感じたので間違いない。

そんな二人と違い、まゆり、ルカ、留未穂の三人はバッチを眺めて楽しそうに会話。

可愛い女の子が楽しそうに顔を合わせているのは見ていて凄く和んだ、君たちには俺の数少ない癒し要素として今後も是非とも頑張って欲しい。

その場にいるもう一人の男である橋田は何か気になることでもあるのか、手にしたバッチを見て頭を捻っていた。

そして、最後の一人である鈴羽は何やら強い意志が込められた眼差しでバッチをじっと眺めていた。

――――阿万音鈴羽、彼女には他の者に比べ、少し気になる部分がある。

何と言うか違和感があるのだ、どうにも私たちのことを最初から知っているような素振りが所々に見受けられる。

初めてここに来た時も、普通あるだろう驚きや恐怖といった感情や警戒の姿勢は全く見られず、逆にいつも通りの自然体といった印象を受けた。

岡部たちの話では俺たちが真っ先に敵じゃないと意見したのは彼女だったようだし、アメリアのことも当たり前のように彼女と認識し

てたからな、正直彼女の正体が気にならないわけではない。

だが、詳しい事情は分からないが別に俺たちに害なす存在じゃないみたいだから、この問題は放置する形で鈴羽本人とは付き合っている。

だいたい彼女自身はそんなものが気にならないくらい良い娘だから何も問題ない、これには偶に現れるアメリアも同意してる。

いやあ、この体になって誰かに料理作ってもらえるなんて思いもしなかったね。

しかも、あの世界樹の実をあそこまで美味しく調理できるとは・・・、阿万音鈴羽恐るべし。

そんな感じで本格的な交流が始まったわけだが、マナについての話しに対してクリスの食いつき具合が尋常じゃなかったな。

どうやら彼女の亡くなった父親が研究していたらしく、今では俺やアメリアから聞いた内容とその独自の理論を用いてマナを制御する方法を研究しているらしい。

さすが研究大好きっ娘、岡部の言う通りだった。

その他の面子とは基本的に雑談を交わして過ごしている。

女子組とは岡部とクリスがなかなかくっつかないだとか話したり、橋田とは戦術機について話したり。
偶に岡部がそこに加わるのだが、すぐにクリスに呼ばれて戻ってしまうのがパターン化していた。

『クリスも素直じゃないな』
「そこが可愛いんだよー」
「岡部さん・・・」
「むむ、やっぱり、るかちゃんはキョーマのことが気になるのかな？」
「そ、そんなっ、ことないです・・・」
「漆原るか、決めるのは岡部倫太郎だよ。遠慮しちゃ駄目」
「るかちゃん、オカリンはちゃんと見てくれるよ。だから勇気を出してみようよ！」
「そう、かな・・・？」
「そうだよ、ほら髪を整えて・・・よし！ほらしゅっぱーつ！」
「しんこー！」
「おー」

「え、ええ！？」

「む、お前たち揃ってどうした？」

「ちょ！何よあんた達！」

「クリスちゃん、キョーマの独り占めはいけないんだと思うなー私」

「そうだよ、牧瀬紅莉栖。岡部倫太郎は君だけのものじゃないんだ」

「べ、別に私だけのなんて・・・」

「クリスちゃん、考えてること丸分かりだよー」

「な、別に私だけの岡部を想像したとかじゃないんだから！違うんだからな！」

「助手よ・・・、お前はいったい何を言っているのだ？」

「あ、あの岡部さん・・・」

こうして今日も岡部の女難は続く！

「オカリン、許さない絶対にだ」

『もてる奴が近くにいると辛いねー』

そんな感じにいつしか俺たちの交流は日常の一部になっていったのだった。

過ぎる日々、交流する守護者（後書き）

あー先の展開が思い浮かばない・・・、地上のＢＥＴＡを殲滅しても月のハイヴあるし、土地の取り合いとイリス自体の捕獲作戦とかも絶対あり得るし。

戦力的な問題や物資的な問題でアメリカに強くでれるとこないし、ぶっちゃけ国連軍はアメリカ軍なしには機能しないんじゃね？って感じだし。

かなりの確率で国連はアメリカに乗っ取られてるんじゃね？とか考えてしまいます。

詳しいところはクロニクル０２やってないんで分かりませんが、まとめｗｉｋｉ情報から、近くハイヴが建造されて２００６年度中に人類滅亡したんじゃないかと考えています。

ですので、とりあえずそれを回避する方向で行きたい。

が、たぶんある程度生態系回復させたら、後は現地民に丸投げで次の世界かも・・・

彼と彼女（前書き）

この作品の紅莉栖の父親は原作とは似ても似つかない優秀な人です。人間的にも。

彼と彼女

手にした奇妙な形をした果実の皮を剥いて、表れた桃色の果肉に小さい口でかじり付く。

すると、すぐに潤いに満ちた果汁がわき水のようにじわっと溢れ、口の中に甘くもあるし辛くもあるなんとも表現し辛い不思議な、だけど確かに美味しい味を与えてくれる。

口の中で潰される果肉は皮の堅さからは想像できないほどに柔らかく、昔お祝いで一度だけ食べたお餅のようにもちもちとした弾力があり、噛めば噛むほど味が出て、噛むという行為自体を食の楽しみへと変えてくれた。

目の前でまゆりがにこにこしながらその果実を咀嚼するのを紅莉栖は呆れた顔で眺めていた。

「まゆりは本当に発光樹の実が好きなのね・・・」

「うん、紅莉栖ちゃん達もどお？もちもちしてて美味しいよ」

「あ、あはは、私はちょっと遠慮しようかな・・・？」

「わ、私もあの味はちょっと・・・」

「私も遠慮します。味もそうですが、触感がだめです」

えーと少し不満そうな色を声に滲ませ新しい実を差し出していた手を引き戻すまゆりの姿に、心なしかホッとした表情を浮かべる三人。

彼らのような反応は一度あの実を口にした者ならして当たり前なもの。

そこまで発光樹の実と呼ばれるその果実は不味かった。もう、壊滅的に。

――――発光樹、正確には世界樹と言うらしいが、それは島に存在する自ら光を放つ大樹の名前だ。

夜は明かり代わりになるし、日中は日除けにもなるので色々と重宝する存在である。

その存在はこの変わり果てた大地に唯一まともな状態で残る大樹だろうと誰もが考え、その生存能力の高さに生命の神秘を感じたのは記憶に新しい。

・・・実際は”彼”によって創られ維持されているらしいから、生命の神秘とかそんなレベルで片付けられないのだが。

そんな発光樹だが、分類的に果実の生る樹なのか、奇妙な形の実が大量にぶら下がっている。

今まゆりが口にしているのはそれだ。

最初は誰もが生きるためにと仕方なく食べていたのだが、私達の様子を見ていた彼がそれがあまりに辛そうに見えたらしく、急遽果実系の樹を創ってくれたので今では好んで食べる者は一人としていない。

もちろんまゆりを除いてだ。

それは夜が明け、突然現れた樹に対して怪しがる者などおらず、逆に涙を流す者がいたくらいだったことがよく表している。

ああ、それくらい不味い。

「でも、本当に体は大丈夫なの？」

「そうだよまゆりちゃん、食べ過ぎはよくないってあの人も言ってたんだから・・・」

「それ以前によく飽きませんね・・・」

三人が気にしているのはまゆりの体のことだ。

彼女たちをＢＥＴＡの驚異から救い、この島に連れてきた張本人である銀甲冑ことイリスは、まゆりの体が少しずつ変質していると語っていた。

その一例が、彼女の体が彼らとの交信を可能にした件だ。

どうやらまゆりの体内に存在するマナの循環に新しい経路が構築されているらしい。

それが新たな能力と呼べる、未知の何かを作り出し、まゆりの体へと影響を与えていると言うのだ。

・・・本当のことを言うと、紅莉栖はまゆりの交信能力と呼べるこの力の発現を誰よりも喜んだ。

今まで漠然と敵対の意志はないとしか分からなかった銀甲冑とのコミュニケーションを謀れる。

それは紅莉栖が抱えていて疑問への明確な答えを知る、一生に一度のチャンスだった。

この大地で手に取った亡き父の説が指し示す未来への可能性、相手がそれを証明する存在である確信、香月博士が別れ際に教えてくれた第四計画の目的、全てが一瞬の内に彼女の頭を満たす。

まゆりの姿はそこにはなかった。

その時の彼女は真理を求める純粋な科学者だった。

だが、牧瀬紅莉栖はどうしようもなく科学者を体現するが、またどうしようもなく優しい女性でもあった。

視界に不安そうなまゆりの姿を入れた瞬間、科学者の牧瀬紅莉栖は身を潜め、優しい友達思いのただの紅莉栖が彼女になる。

それと同時に、紅莉栖はまゆりの体を都合の良い翻訳機と見ていた自分に気付き、そんな自分が心底嫌で顔を歪めた。

人を人として見ないところまで墜ちたら、彼女の中にある科学者の名はただの免罪符を語る存在へと成り下がる。

紅莉栖が生まれた時から見続け、必死で追い掛けた科学者の姿はそんなものではなかった。

何時も夢見たいなことを語り、信じ、人を幸せにしたいと努力し、それを笑われようと最後まで貫き通す、それが牧瀬紅莉栖の中にある科学者の姿だ。

だから、紅莉栖はまゆりに謝った。

自分はあなたを一瞬でも都合の良い翻訳機と思ってしまった、どうか許して欲しい、と。

そんな彼女の告白にまゆりはきょとんとして、笑った。

「やっぱりクリスちゃんは優しいな」

いつも通りのほんわかした笑顔で、まゆりは彼女へと言葉を返す。

「でも、やっとオカリンの役に立てることを見つけたんだー。だから、まゆしぃはいっぱい、いーぱい食べて、どんどん役にたっちゃ

うのです」

まゆりは幼い頃、本土のＢＥＴＡ侵攻で大好きだった祖母を失い、生きることを諦めた死人のような姿をしていた時期があった。

それはまるで、不意に風で消えてしまうような儚い灯火。

まゆりの両親や近所の誰もが彼女のことを心配し、幾つも声をかけたが、そのどれもが彼女を救い上げない。

そんな当時の彼女を救ったのは、幼馴染みである岡部倫太郎、彼は祖母の墓の前でぼんやりと立ち尽くす彼女を優しく抱きしめ言った。

――――まゆりは俺の相棒だ。俺がＢＥＴＡをやっつけるまで勝手にどこかに行くことなんて許さないぞ！

当時の岡部は近所の兄貴分が偶に送ってくる手紙に書いてあった衛士の話しに憧れを抱いており、その中によく登場する相棒の存在がいかに重要なものなのか、子供心にだが理解していた。

だから、その時の彼はまゆりを相棒として絶対に必要不可欠なんだと口にしたのだ。

幼い彼女の心にそれがどう届いたのかは分からない、だが唯一確か

なのは、その次の日から椎名まゆりという少女は岡部倫太郎の相棒となった。

それからしばらくして、岡部が高熱を出して寝込み、心配したまゆりが彼を付きっ切りで看病する出来事があった。

数日後、熱が下がった彼は雰囲気や言動がかなり変わっていたが、まゆりはそれでもまったく気にならなかった。

彼女には前の彼も今の彼も、同じ岡部倫太郎には変わりなかったのだ。

――――椎名まゆりは自分の鈍くささを理解している。

成長した二人は当然のように訓練校に入ったが、そこで行われる訓練で彼女はいつも岡部の足を引っ張り、迷惑をかけていた。

岡部は何をするにも人より時間を必要とした彼女を嫌な顔一つせずに、自分の休息時間を削ってまで訓練に付き合ってくれる。

――――相棒だからと口にしながら。

この頃から彼女にとって、救いの言葉だったそれが重石に感じるようになっていった。

自分は彼の重石になっているのではないか、本当は自分のことを迷惑な奴だと思っているんじゃないのか。

――――私は彼の役に立てているのか？

それは任官し、衛士として死の八分を越え、数度のＢＥＴＡ戦を経た今でも、彼女の中に深く根ずく楔。

だから、今回自分しか出来ないことが目の前に現れたことを心のどこかで歓喜している自分がいた。

本当にそれが彼の役に立つことなのか、不安は感じたがそれは最初だけだ、すぐにその重要性と必要性を理解する。

――――これは私にしか出来ない役割。

――――私は今確かに彼の役に立っている！

この島に来て、椎名まゆりは初めて彼を支える相棒として胸を張ることが出来たのだ。

◇

「んー、美味しかったー」

「見事に完食ね・・・」

「何度見ても驚きの瞬間です・・・」

「うわぁ、本当に皮しか残ってない・・・」

まゆりの綺麗な食べっぷりにそれぞれ感心した風に言葉をこぼす。

二個目に手を出そうとするまゆりを皆で止めて、いつもの雑談会へ

と移行する。

それから三十分程話した後、紅莉栖は長居しすぎたことに気がつき席を立つ。

実は彼女、研究の合間に休憩と名を称して抜け出してきたのだ。

彼女は他の三人に断りを入れて、急いでまゆりの部屋を飛び出した。

大型戦術機空母と名は付いているが、この手の船の通路があまり広くないのはお決まりである。

「っと、急がないと・・・」

早足になるのを抑えて通路を進む紅莉栖の目の前に、反対方向から談笑しながら歩いてくる二人の兵士の姿が現れる。

「ごめんなさい。急いでいるので、ちょっと通らせてもらいますね」

「ん、ああ」

「お、おお」

相手はお喋りに夢中で自分には気付かなそうだったので、紅莉栖は先に断りを入れて両者の間にあった隙間をすり抜けるようにして通過する。

そのまま彼女は速度を緩めずに、目的の場所に向けて通路を突き進んだ。

紅莉栖が通り過ぎた後、少し遅れて二人の兵士が口を開く。

「なあ、今のって確か・・・」

「ああ、牧瀬紅莉栖だな」

「やっぱりそうか！あいつ、この前あの化け物相手に独り言を喋ってたぜ！」

「それ、確か意志疎通を図ってるって話しだぞ」

「は？あれって喋れんのかよ？」

「喋れるんじゃないか？じゃなきゃ、ただの頭の可笑しい女だろ」

「そりゃそーか！まぁ俺からしたら、余計なことしてあの化け物共を暴れさせなきゃ、別に何しててもいいがな！」

「確かに、それは俺も同意する」

「だろ？それより、今はあの貧相な女のことなんか忘れて、もっと別のこと話そうぜ？」

「それもそうだな」

紅莉栖は彼らの会話を無意識に鍛えられた耳でしっかりと聞いていた。

「誰が貧相よ・・・！」

結果、一番頭に来たのが自分のスタイルについてだったのは、その手の罵声暴言に耐性を付け始めたことの表れなのか・・・

とにかく彼女は怒りを胸の内に残しながら目的地へと辿り着く。

そこは空き部屋を借りて作った即席の研究所で、今は一日の間で彼女が自分の部屋より長く過ごす場所でもある。

「む、遅いぞ！クリスティーナ！」

「おお、牧瀬さん！待ってたお！」

扉を開けて中に入ると、早速声をかけてくる二人の男、無駄に白衣を着こなす岡部倫太郎と大柄で眼鏡をかけている橋田至だ。

二人とも紅莉栖の研究に手を貸してくれる頼りになる仲間、岡部曰くラボラトリーメンバー、ラボメンだ。

ちなみに、まゆり、るか、留未穂、鈴羽の四人もそのメンバーに入っている。

遅れたことを咎めるような二人の声に、紅莉栖は怒りを滲ませた返事を返す。

「・・・遅れたわ」

「な、なんか怒ってないか？」

「ま、牧瀬さん・・・？」

恐る恐ると尋ねる男二人、特に岡部はいつもの無駄に態度のでかい姿に比べ、実に情けないものだ。

紅莉栖はそんな岡部をキッと鋭い視線で捕らえ、胸の内に未だ残る怒りの導火線に火を付けた。

「ティーナは禁止と言っとるだろうがあああああ！！」

「え、あ、すま――」

「後、誰が貧相な体だって！？これでもスタイルはいいんだからな！女を胸でしか考えられないとかナンセンスだっつーのよ！！」

「は？何を言って――」

「だいたい、男は皆そうよ！最初は顔見て見惚れるくせに、胸に視線が移った瞬間に残念そうな顔しやがって！胸か！？胸がそんなに大切か！？」

「ク、クリス、落ち着け！く、おい、ダル何とかしろ！」

「オカリン、牧瀬さんも帰ってきたことだし、僕休憩に行ってくる

お」

「な！？貴様っ、俺を見捨てるつもりか！」

「リア充、乙！」

「おい！何でお前がその言葉を知っている！って待て！ダル！ダァアアアルッ！！」

「ちょっと岡部ッ！聞いてるの！？どうせあんたも胸が大きいのが一番なんでしょ！分かってるわよ！まゆりはおっきいもんね！悪かったな小さくて！？」

「ぐ、クリス！まずは落ち着け！話しが瞑想しているぞ！？」

「だいたいこの世界の女性の発育の良さは異常なのよ！？誰も彼もでかいもの持ちやがって！ふざけんなっ！！」

「駄目か・・・」

「ちょっと聞いてるの岡部！？だいたい、あんたもあんたで女の衛士に鼻伸ばしちゃって！スケベ！バカ！鈍感！」

「これは・・・長引きそうだ・・・」

「人の話しはちゃんと聞けっ！！」

十分後、壮絶なマシンガントークをかました本人は現在、部屋の隅でどんよりとした雰囲気を纏って膝を抱えていた。

「はぁ・・・クリス、いい加減落ち着いたか？」

「・・・うん」

「なら、始めても平気か？」

「・・・ねえ、岡部も・・・その・・・」

「なんだ？」

「やっぱり、その・・・胸が、大きい女性の方が好みなの？」

「はぁあ？何を言い出すかと思えばそんなことか。いぃいだろぉ、特別に教えてやるぅ。俺の第二の魔眼は人の本質を見抜く、その名も――」

「・・・まじめに答えて」

いつも通りの訳が分からない設定とやらを語り始めようとする岡部に、紅莉栖は真面目に答えろと真剣な眼差しを向けて訴える。

岡部はよく見れば不安が見え隠れするそれを受け、真面目な話しだと理解して、難しそうな顔で頭を掻いた。

「・・・俺は、別に胸の大きさなんて気にしない」

「・・・」

「そんなもので選ぶほど、子供じゃない。生き様というか・・・、その立ち姿というか・・・、とにかく俺はその人そのものを見る。・・・これでいいか？」

「・・・うん、・・・よかった」

「「・・・」」

「んん〝ん〟！ほら、満足しただろ！さっさと始めるぞクリスティーナ！」

「ティーナは禁止！」

「なぁらば助手よぉ」

「助手でもないわ！」

いつものようなやり取りを交わして機材の置かれた机に向かっていく二人、だが紅莉栖の横顔に不安の色はもう無かった。

そこは船にある部屋の一つ、真っ暗な室内を窓から差し込む世界樹の光がぼんやりと照らしている。

「――もうすぐ」

人口のものでは感じない、どこか優しさを含んだ明かりを受けながら、部屋の主である少女は手にしたバッジを眺めて静かに呟く。

「今度はあんな結果にはさせない」

手のひらのバッチをきつく握り締めて、上げた顔は決意を固めた戦士そのもの。

「私が救ってみせる・・・！」

阿万音鈴羽は世界樹が照らす暗闇の中で、ここにはいない誰かに誓うように宣言した。

彼と彼女（後書き）

結末は考えているのですが、そこにどう繋げるか？それが悩みの種。

イリス達はラストに大規模な戦闘が予定にあるけど、後は特にない。なぜなら、怪獣ものはでかい戦闘二回が個人的にイメージとしてあるから。

顔見せ→決着って勝手なイメージがあるわけです。途中で人間含んだ小規模戦がありますがね。

それと、リコットについては、正直な話し、・・・忘れかけてた。すまん、リコット。

実は今の状態でも彼女の体自体は創れますが、魂の定着とかは出来ません。

加えて、この世界で再誕させたら、絶望的な現実しかないって罠。せめて、滅亡へのカウントダウンがない世界で登場させてやりたいわけです。

再び塩の大地へ（前書き）

今回、無理矢理な展開です。

再び塩の大地へ

「君たちには島を出て行ってもらいたい」

『・・・どういうことだ』

「分からないかね？この島は私たちが人間の手で守ると言っているのだよ」

『・・・』

「ふ、心配しなくても、我がアメリカ軍の精鋭はＢＥＴＡの残党などに負けはせんよ。それとも何かね？君は私たちを家畜か何かかと思っているのか？だとしたらあまり友好的な関係は築けそうにないが・・・、分かってくれるかね？」

『・・・分かった。あなた達がそう判断したのなら、俺たちは何も言うことはない。大人しく島を出るとしよう』

「理解があって嬉しいよ。安心したまえ、島は我々が責任持って管理しよう！」

数日前、俺たちの前に現れたいけ好かない外国人の男との会話だ。

俺たちは突然島に現れた軍艦に乗った連中の言い分を聞いて、あの島を離れることになり、今は二人（いや、この場合二体か？）で塩

の砂漠を踏みしめている。

会話を聞いただけでは俺たちが追い出されたように見えるが、これは正解でもあり不正解でもある。

今回の話し、確かに形としては追い出されたようなものだが、俺たちとしてもいつか選択しなければならなかったことでもあった。

半月程前に、島の生態系の回復をほぼ完璧に終わらせた俺たちは、今回のテストケースで学んだ知識や効率化した技能を持って、大規模な環境再生を実行する計画を立てていたのだ。

それには生態系を回復させる際、一番の問題点だった動物や虫などに関してを、意外な盲点であるギャオスの遺伝子情報から解決したことが大きく関わっている。

ギャオスは超遺伝子獣の名が示す通り、地上に存在するありとあらゆる生物の遺伝子情報を元にその体が形作られている。

つまり、ギャオスの遺伝子は数百、数千の遺伝子情報を複雑に絡み合わせて創り上げられたものなのだ。

そして、今の俺達にとってそれは正にノアの箱舟、読み解かれた遺伝子情報は全て生物の形を成して、不完全だった生態系を完成へと至らせた。

これにより島でのテストケースは終わりを迎えて、視野は外へ、世界へと向いたのだ。

だが島を出たのは、それ以外にもあの時、あの外国人が言ったことも理由としてある。

自分が人間をあまりに弱く、庇護対象として見ているなんて、考えてもみないことだった。

いや、心の底では自分が助けなくてはならない存在だと考えていたかもしれない、だが、ただ守護者として在ろうとした自分では気がつかなかったのだ。

確かに俺は今まで戦う力がない人々をギャオスという驚異から救ってきた。

彼らは弱く、一方的に蹂躙されるだけで、いつも嘆き、怯え、身を縮めていた。

ーーーーだが、それが全てだったか？

断じて違う、違うことを忘れている。

彼らは剣を取り、知恵を巡らせ、勇気を持って愛する者たちのために戦った。

それは人の見せた強さ、困難に立ち向かう力だ。

それに気がついておきながら、いつまでも彼らを自分が守らないといけない存在だと、言い張れるか？

・・・俺には無理だ。

彼らは自分で立ち向かう力を持っている、ならばそれに託してもいいんじゃないか？そう思ったのだ。

たとえそれで消える命があったとしても、その行為自体を取り上げてはならないと俺は思うのだ。

まあ、あの男の場合は他に何か思惑がありそうだったが。

だとしても、改めて自分のスタンスを見つめ直す機会を与えてくれた事実もあるので、あまり悪いようには言えないんだけどな。

少し心残りなのは、まゆりやクリスたちのことだがーー、いや、そこまで彼らを心配するのも彼らに対して失礼か。

クリスには俺が持っている生物の遺伝子情報を圧縮させて保存した特殊なデータ端末を渡してあるし、島の生態系に何かあっても、彼女ならそれで十分に対応してくれるはず。

彼女は俺が初めて見た天才って言葉を体現した人間だったからな。

いやあ、一年ちょっとでマナを実用化一歩手前まで持ってくなんて、いくら俺たちの存在や亡くなった親父さんの理論があったからだと

しても、凄いって表現ではまったく足りない正に偉業と呼べる行いだ。

そんな彼女がいるのだから技術的な面では問題ないだろうし、後から防衛用の戦術機を追加で輸送してくるみたいだから防衛面でも問題ないはず。

岡部たちもあの交流の中で、自分たちも衛士としての腕には自信があると語ってくれた。

ここまで揃えば、そろそろ島に留まるのも潮時だと判断しても別に変なことじゃない。

ーーーーと、まあこんな感じで島を飛び出してきたわけだが、今の俺たちはこの塩の砂漠に新たな命を吹き込む作業に勤しんでいる。

あの島から海を越え、辿り着いたのは今は懐かしき塩の砂漠が広がるこの大地。

ここはまともに大陸の形で存在はしているが、その大部分が塩の砂漠であるため、この大地から本格的な環境再生計画を実行することにしたのだ。

今も環境再生の下準備として地表に積もった塩の山をマナに変換している最中、やり方は至って簡単、ひたすら触手で吸収変換だ、・・・味覚の切り替えが出来て本当によかった。

塩の粒みたいな小さな物でも問答無用で吸収出来ちゃう自分の触手に惚れ惚れするぜ！と内心思いながら、その場に体を固定して四本の触手をフル稼働で使用中。

アメリアは動けない俺に変わり、辺りを探索しに出かけているのでこの場にはいない。

マナの乱れは一年以上経っても依然として回復する兆しはなしで、これに関しては地道に環境を再生させなくては駄目らしい。

当然、まともにマナ探知が使えないため、目測での情報収集か移動しての小規模なマナ探知に頼らなくてはならない。

アメリアが探索に出ている理由はそれである。

ガメラが探索に向いているかと言われたら言葉に詰まるが、彼女はマナ探知に関しては俺より熟練度が高いので問題ない。

飛び方が円盤状でも無問題、今頃上空からレーダーを飛ばす様に地上の状態を確認していることだろう。

とにかく、今は彼女のことを気にしても仕方ない。

俺の役割は大地の再生、この大量の塩を片付けたら、出てきた大地を使える状態に作り替えなければならない、それがまた時間をくうのだ。

今は気合いを入れ直して、作業に意識を集中させた。

◇

塩の砂漠の大部分が土の大地に変わる頃、探索に出ていたアメリアが情報片手に帰還した。

彼女の報告によると、この塩の砂漠はかなりの規模にわたって存在しているらしい。

詳しく聞くと、この大陸が塩の砂漠で出来ていると言っても過言ではないレベルだそうで、今の地表がどこもこんな状態なら計画を練り直す必要すらあると感じたとのこと。

確かにどこも塩だらけでは、自然を局地的に再生させていき、マナの循環の再生を図るという今の計画では支障が出るだろう、彼女の懸念はもっともなことだった。

これについては後で話し合うとして、彼女はこの他にも嬉しい情報を持ち帰って来てくれた。

なんと、まともな状態とは言えないが人が住める土地がわずかに存在し、そこに人々がキャンプを作り暮らしていると言うのだ！

そこはここからだいぶ離れた場所らしいが、戦術機も二十体近く存在し、所々にＢＥＴＡの侵攻に耐えてきた傷跡を残しながらも懸命に生きる人々がいたらしい。

・・・もしかしたら島に来た軍艦はそこからやって来たのかもしれない。

だとしたら、意図しないことだとしても彼らの貴重な戦力を奪ったことには違いないのだ。

余計なお節介ではあるが、彼らを気にしておいても別に罰は当たらないだろう。

もっとも、彼らの対処出来る範囲の内では、こちらは一切手を出さないが。

まあ、そこまで大規模なＢＥＴＡの群はこの大陸にはいないはずだから、それは余計な心配になりそうだけどな。

彼らについては今後そのように対応すると決まり、俺たちはさっそく計画の見直しについての話し合いに移るのだった。

◇

『そなたが白銀武ですね』

『な、冥夜！？な、何で冥夜がここに！？お前はあの日、宇宙船で脱出したはずじゃ・・・！』

『貴様ッ！無礼だぞ！その手を離せ！』

『ッ！？う、ぐぅう・・・』

『フン、悠陽様！やはり、このような男などに貴方様自らお会いする価値などありません！』

『真耶。少しの間、席を外してもらえませんか』

『な！？しかしッ！』

『真耶』

『ッ！？』

『お願いします』

『くッ、・・・分かりました。ーー貴様！滅多なことは考えるなよ！もしもの時はすぐに私が叩き切ってやるからな！』

『あ、ああ』

『フン、・・・時間は無理しても二十分です。それ以上は私の力では・・・』

『十分です。・・・ありがとう真耶』

『その言葉だけで私には十分です』

『さて・・・、初めまして、白銀武殿。私の名前は煌武院悠陽。日本帝国の政威大将軍であり、ーー冥夜の実の姉です』

『悠陽・・・、冥夜の・・・姉？』

『武殿、冥夜のことを聞かせてもらえませんか？』

外から流れ込んでくる人々の騒音で、俺は夢の世界から目を覚ました。

衛士としての俺は残った眠気を一気に吹き飛ばし、頭の思考を回転させる。

「・・・ＢＥＴＡ、じゃないな」

聞こえてくる声にはあの独特の緊張感がない、どうやらＢＥＴＡではないようだ。

だとしたらいったい何があったのか、少し気になり上着を手に取り建物の外へ出る。

最近はここでの生活もだいぶ落ち着いてきていたから、こんなに騒がしいのはーー、いや、数日前に在中していたアメリカ軍が突然任務で島を出ていった時はこんな騒ぎどころじゃなかったか。

あのバビロンの悲劇の後、被害を逃れたハワイで帝国が借用地としてアメリカから差し出されたこの土地は、日本列島が海に沈み、行く先のない難民となった日本国民たちにとってはあまりに狭すぎる場所だった。

だが、今の地球にはまともに人が住める土地がないので帝国の移住区として借りられるだけでもマシだ、外交問題はこんな所でも付きまとったが、それでも俺たちは今までどうにかやってきた。

ーーーー数日前に在中していたアメリカ軍がいなくなる前までは。

こんな時でも政治的な話しを持ち出すアメリカに対して、住民にはいい感情を持つ者はほとんどいなかったが、その存在が再び現れたＢＥＴＡからこの土地を守るのに必要不可欠だったのは誰もが理解していた。

だから、皆何とか我慢してきたのだ。

それが今回いきなりこの土地からいなくなるという、住民たちとアメリカ軍との衝突は避けられなかった。

その時は住民たちをうまく悠陽が説得したので大事には至らなかったが、住民のアメリカに対する不信感やＢＥＴＡに対する戦力が激減した不安は拭えなかった。

今はどうにか落ち着いたが、今まで以上にＢＥＴＡの襲撃に対して気をはっているために、普段は緊張感が漂うここではやはりこんな騒ぎは珍しいのだ。

悪いことでなければいいと思いながら、俺は足早にこの騒ぎの元へ向かうのだった。

予想に反して、騒ぎの理由はすぐに分かった。

今までは存在しなかった見慣れた戦術機が五体、国連仕様の不知火がそこには並んでいて、人集りはそれを囲うようにして出来ていた。

その様子から騒ぎの理由が何となく理解できたが、誰かに詳しく話しを聞こうと目を回すと人集りから少し離れた場所に見知った顔を見つける。

「神宮司少佐！」

「ん？白銀中尉か」

「あの機体・・・、まさか生存者ですか？」

「ああ、どうやらシェルベリ少尉の時と同じらしい。もっとも、彼らの場合は海を越えて来たらしいが」

「な！？海をですか？それはまた大胆なことしましたね・・・」

「推進剤も見事に空。正直、辿り着いたのが奇跡のようなものだ」

「そうですか・・・でも、無事に辿り着けてよかった」

「・・・だといいのだがな」

まもりちゃんが呟くその言葉に、俺は複雑な思いを浮かべることになった。

再び塩の大地へ（後書き）

マブラヴは国同士の情勢が難しい。この作品はその辺深く考えずに書かれているので、矛盾やそれ違うよ！って部分があっても、気にしちゃ駄目です。

元々、人間サイドなんて詳しく書くつもりなかったので、設定とか甘々ですから。

あと、試しに書いたシュタゲ陣が予想以上にキャラ強すぎて、これシュタゲじゃね？とか言われましたが・・・、普通にシュタゲですね。

でも人間サイドの主人公は彼らなので作者は気にしない！

この世界、終わってみたら、マブラヴは世界観だけ利用みたいなことになっててても可笑しくないな・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0718x/

邪神じゃなくて守護者になりたい

2011年10月11日12時58分発行